

7692

宮武藏一本

英勇

美談

錦特 9
4 玉口演
速記社員速記



東京
博藏堂

藏

宮本武藏序

君文の仇には俱に天を戴かずとて今は昔し仇討あるもの、行はれけるが开か中に宮本武藏の復讐美談に至つては普く人口に膾炙せられ既に三才の童子も亦克く之を知るに至る然れども對手は名に負ふ劔法の達人佐々木岸柳にして燕返しつばねがへしの妙術めうじゆつを工夫せ忘に至る程あれば實に容易やすみある敵にあらず去ればとて其儘にして日月を送らば天下の笑ひを如何せん嘗に天下の笑ひを受くるのみあらす子たる者の情として如何て鬱憤うつぷんを晴さそ止まんとどま縦令たてま返り討ちかへりうちに逢迄も勇まじき門出かどでをなして搜索さくさく



悪狐美少年
小化丁切
道小黒上
武三四山退
台子子備





岸柳官大夫と
名乗つて國々
を遍歴する
豊前安達山
子猛獸を仕
止る

官本武藏

英雄談 宮本武藏

第一回

錦城齋貞玉講演
福井順作速記

今回宮本武藏政名の實傳を講演致します併し之には是迄種々の傳説
しがありまして既に速記になつたもの及び其他古くより武藏と佐々
木岸柳の傳様々綴りし本が出て居りますそれに又講談師が高座にて
喋々と演じて居りますが一として其實を挙げたるものありません
故此度貞玉が種々取調べまして其實傳を演じます中には宮本武藏は
寛永年間徳川三代將軍の御代に御前へ出で立合を致したとか又は
石川軍刀齋岩流と云ふ人の弟子である杯と云ふやうな御話しもあり
まして最も其事蹟を寛永にして演じます者がありますが大に相違

追跡せずんば怨の解くべきものにあらず故を以て武藏
は他家に仕ふる養子の身を以てして猶且つ岸柳の行衛
を逃ね強敵たりとて屑とせず平素鍛錬せる二刀流の奥
儀を以て終に邂逅の曉に及び首尾克く本望を達するに
至れり今や本書は其顛末を講談し速記に附して出版す
るものあれば婦女子と雖猶克く情態を穿ち得直ちに愉
快なる真相を知る事を得ん

三十二年如月初浣

天野機節誌

官本武藏

致します、天正の頃より正保に至るまで世を送りまして長命の人ではあります、然るに其宮本が盛ん、國々を廻りましたのは天正の頃、かつて二様に分けまして演じます、宮本武藏が二人ある、譯は、其内天正の宮本にも種々附會の説を演じて居る者もあり、茲に宮本と云ふ人は二刀の達人でありまして既に武藝小傳又は武術流祖録等にも出て居ります、政名流二天流杯と書いてあります、其門人に青木城右衛門金家と云ふ人がございまして此人が宮本の術を充分受得ました、然るに其人後に二刀鉄人流と流名を廣めました、そこで劍道にて日下開山と言はれましたのは宮本武藏でござい、尤も相撲にも取が、ありまして之が横綱の元祖であります、話には少し違ひます、相撲が鳥渡爰で申し上げて置きます、明治三十一年の今日横綱を張て居る

官本武藏

のは十七代目小錦八十吉でござい、すけれども日下開山と云ふ文字を上へ附けましたのは明石志賀之助ばかり、モウ斯くまでに名を得ました時は如何、者か来ても負けないと云ふ所謂保険附でござい、然れば荒木又右衛門吉村は豪勇、宮本武藏は名人、ソコで此武藏の名前でござい、ます、草双紙体の本杯には無三四杯と書いてあります、之は徳川の浮世の浮話しに致しました、がため、全くは武藏と書いた、のでござい、ます、之を以ても分りませう、徳川様、浮世には武藏と云ふ名を附けられないのは、當り前……備前の大守新太郎少將光政公が武藏守を、願ひに相成りました、が、許しがありません、故に光政公、浮立腹に相な、らば、予は生涯、新太郎で世を送ると仰せられ、まして、任官遊ば、され、ません、此君は東照宮の孫に當らせられる、方、でござい、ます、それ、で、さへ武藏守を名乗ることは出来、ませ、ない、それ、です、から、宮本は徳川、の御代の前に名を博めました、人に相違ありませ、ん、之が第一の證、で、

官本武藏

四
さいます其履歷の本を詳しく尋ねまするに足利十三代將軍義輝公の御家に吉岡無二齋と申して文武兩道に達したる人がありまして誠に温厚篤實の壯士でありました就中劍道は自見流の達人でございまして此劍道は誰より無二齋は學んだかと申しますれば同藩に瀬戸口備前と云ふ人がございまして此人より軍學兵法の事を悉く學び猶更劍道を學んだ人でございまして諸所の戰爭に數度の功名を願はしました或時將軍義輝公諸國の劍道者を彙集めに相成て其仕合を御上覽あらせられました其中に吉岡太郎左衛門は其妙術を以て百六十餘番の立合の内第一を占めました何れも其時分日本に高名な名人と謂はれましたる人々十六人に打勝ちましたから將軍悉く御感心あらせられまして實に二人と無い劍道の達人であると云つて夫より無二齋の號を義輝將軍より賜はりましたものでございまして是れ太郎左衛門が名を擧げる原……斯の如き人でございします故平生は誠に温順柔和尤

官本武藏

も之は軍人の心掛ける所でありまして平生は沈着に致して卒さ戰場へ出でたる時は充分に其勇氣を合ひが當り前それを動もすると心得違ひの人は平生乃公は軍人だ乃公は兵隊だと云つて往來を打振て歩き或る時は酒に酔ふて往來人の妨げをする御方杯も時々は見へまするが爾ふ云ふ御方は戰場へ出ましては少しも役に立ちません平生は女子供に柔らかに言葉を掛け柔弱を是と致し戰場へ出でたる時は我邦のため瓦とあつて完たからんより玉となつて打碎けると云ふのが軍人の常斯う心得たいものです然れば吉岡太郎左衛門が無二齋の號を賜はりましたのも其心掛け充分あるからでございまして茲に榮枯盛衰は天の命する所にして之は致し方はございませぬ足利は十三代の世よしと遂に三好松永等の謀叛……其他其時分の事を精しく御話しを辨ずると長くありまするから茲には述べませんが遂に足利は亡びて仕舞ひまして御家の人も思ひく離散を致しました其

藏 武 本 官

中に音阿無二齋は少しの便りを得まして播州姫路の片邊りなる新見村と云ふ所へ参り柴の庵を結び世を棄た人と相成りましてモウ浮世の塵は厭やであると云つて別に主取りも致しません此無二齋に二人の子がありまして何れも男子兄を清三郎と申して丁度其時八歳弟を七之助と申して四歳にありませす此二人の子供を手の裡の玉と愛し唯だ二人の子が成長するを樂しみにまて侈座あさる尤も子寶と云つて福者の數に入ると誰やらが申しましたが人間子供があければ往きません幾ら財産家でも子が無ければ他人を養子にして己れが汗水を出して溜めました財産を譲らなければならんそれですから子供は澤山侈拵らへあさるが宜しうございます中には心得違ひの人があつて己らア何うも小兒が多くて往けぬ貧乏人の子澤山拵と云ふは大きに心得違ひ男子が出来ますれば年齢に相成れば兵役に就て國の爲に御奉公をし女の子が出来ますれば學問をさして女教師にもなり下等社

藏 武 本 官

會は女の子が出来たら藝妓にして紳士を銜へさして藝妓が變じて權妻となる之は滑稽の餘事……然るに此兄の清三郎は誠に温和しうございまするが弟の七之助の方は天性備はりし英智でございまして殊に悪戯者誠に親の無二齋も折々小言は言ひますが少きも父のやす言を用ゐさせん兄の清三郎が却て弟に逆待られる位併ながら此七之助は折々小さい子供に似合はん事を申します 七、父上さん坊は大きくなると日本一になるよ坊は……日本一になるよと云ふ事を始終申して居ります或日父の無二齋が 無、コラ、七坊お前は日本一にあると云ふが何を以て名を擧げるのか 七、父上さん尊父は劍術の師匠さんでございませう 無、オ、…… 七、舞劍家の家に生れ、ば劍術を學ぶを以て善しと致します、それですから私は劍術つかひの日本一まなります、其言ふ事最も善し、無二齋は莞爾笑ふて 無、爾うか、それでは日本一の舞劍家になるか 七、あります 無、誰に學んで舞劍家にあるか

藏 武 本 官

七之はしたり父上何を仰しやいませ、誰に學ぶと云つて私は吉岡無二齋の倅でございませ、然れば父より學んで父の流を廣めます併し父上さん尊父は段々少年を取取あさいますと人間は其傳さへ變るもので……然すれば劍術も年を取ると云ふと段々老練させう……無坊でございませ、之を聴くより無二齋膝を敲いて喜んで、無ア面白……斯う申しましたる言葉は全然二十歳以上の者の言ふ言葉でありませ、ナカク、爾うでない漸う十一二歳でございませ、實に天晴れ秀才の童兒ありと知る者知らぬ者も皆之を賞讃しましたさうでございませ、初徳川家康公は天正十八年八月武藏國江戸に御入在、慶長五年石田三成の叛逆以後天下統一統の後には武藏の號を名稱致しませる者は一人もありませ、茲に柳生又左衛門宗矩此方柳生流の元祖だと申しませ、が之は眞影流でございませ、柳生流は其傳子息十

藏 武 本 官

兵衛三嚴殿が御廣めに相なつたもの、又塚原卜傳と云ふ人がありませ、た之は卜傳流と云ふ一派を廣めました、鎗術には法藏院覺禪房胤榮と云ふ人が法藏院流を廣めました、關口彌左衛門といふ云ふ人は關口流の元祖伊東一刀齋は景久と云ふ實名にして一刀流の始祖其門人に神子上典膳後に小野と改名致しました小野派一刀流之は日外貞玉が瓶割典膳のお話しに詳しく申し上げました故茲には略します、又諸岡一羽と云ふ人が諸岡流とも云ひ又中には一羽流とも申します之も一派を廣めました、兼房又三郎は吉岡無二齋の意術を受けまして其名を博めましたものでございませ、佐々木岸柳と云ふ人は佐々木流の達人有馬喜平治は有馬流の元祖でございませ、ソコで吉岡無二齋と云ふ御方は全体二刀ではありませ、右の手に刀を携へ左の手に十手を携へて十手と刀で敵を追拂ひましたものです、此十手は幕政の頃は尤も其前からせうが罪人杯を捕押へませ、る時に之を用ゐるま

藏 武 本 宮

十
した物故何となく賤しいと云ふ所から同じ持つならば左の手に脇差を携へたが宜からうと考へましたのは即ち悴の七之助後に至つて之が宮本武藏とありませす既に此宮本武藏と云ふ人は十三歳より十五歳の立合を致したと云ふ實に珍らしき人でございませすそれに此人書を大層好みまして只今でも宮本武藏の書いた書が好事家の家にございませすのを貞玉も拜見致した事がございませす黒書の意が一羽書いてありませすナカ〜妙筆のやうに見受けました又武藏は一に劍術二に馬術三に書でございませす尤も書も能く致しましたさうでございませす宮本武藏が馬術の達人であると云ふ事は誰も知りませんでしたたが此人大坪古流の指南が出来たる位な人でありませするが劍術で名を賣りませたが爲に宮本は擊劍家なりと現に子供に至るまで知て居りませするのば此處でございませすナカ〜馬術も名人の部であつたさうでござい

藏 武 本 宮

ませす抑無二齋の次男七之助は既に十二歳になりませした時は力量も人に優れ劍術も進みませして此勢ひならば天晴れ世の劍道者もナカ〜及ばざる位にあるだらうと無二齋大層喜んで居りませする名人となる位の者は子供の内から遊ぶ事が遠つて居るものと見へませして常に近所の子供を集め自分より年長なる者を毎度敵きませす竹を取りませると其竹を構へて七サア不殘此方へお出で私しを打ち込んでおいで、金ちやん鐵ちやん糸ちやん不殘一緒に掛つて打ち込んでおいで、近所の子供が立腹致しまして○又始めやアがつた一人で威張つて居やアがる乃公が一番彼奴を打てやらう……後ろから致して一人不意に竹を持って打込で来る、ヒラリと体を交してポイントと向ふを打つ、打つと云ふと道具を着けて居りませせんがために眉間を甚く打たれませして泣いて家へ歸る、又一人が後ろから來て打たうとすると之も引外して向ふへ突飛す、それですから毎日〜親の許へはお宅の七之助さんが

藏 武 本 宮

悪戯をして往けないよ、お宅の坊が往けぬよと云つて言ッ付けに参
りませす、親も實は持餘して居りますす、けれども前申し上げたる通り已れ
は段々年を取るし清三郎の方は一向に剣道の心掛けがきい、此者を何
か剣道者にして吉岡無二齋の刀術を世に遺したいと云ふ氣がありま
する故、或時は叱り又或時は之を愛して居りましたが、或る一日の事無
二齋が庭前に出まして向ふの大きな松の木に的を懸けて手裏劍を打
て居りますす之は身体の運動の爲でございませうか、無ヤア、エイ、ヤ、
エイと打て居る、固より妙手でございませす、故に百發百中一發として
外るゝ事はございません然るに如何致してか、エイと打ちますると後
の一本が思ひの外に的を外れまして「ハッ」と思つて居りますると其後
ろの方で大きな聲を致しまして「ハ、ハ、ハ」と笑ふ、無二齋立腹を致して
無誰じや、無禮者、奴じや、後ろの方にあつて何を笑ふて居ると云つて振
返りますると次男七之助でございませす、大いに怒りまして、無憎くさ

藏 武 本 宮

奴じや子供の分際と致して親を嘲る不届き者、今一度口を開いて見よ
一打にして呉ん、武術に掛つた時は親も子もございません、此處に心を
入れるが當り前、然れば昔しから云ふ武術の立合に貴賤の別は無
主人が臣を相手に立合をする時に其臣が君を貴とみまして故意と負
ける様と云ふやうな事は甚だ宜しくない、それです、から徳川三代將軍
家光公御稽古の時に夥多の彦旗本が御前へ出て上様を打込ひと云ふ
と御不興を受けると心得て故意と負けたりする者がございませ、それ
を彦左衛門が悉く悔しみましたさうでございませ、之は當り前の事
でございませ、無二齋も伴が笑つたに依て子供と雖も惜い奴だ、手打にせ
んと怒つた、七之助は少しも恐るゝ様子はございませ、七、父上さん
何を怒んなさいませ、親なればとて尊父が未熟でお坐ささいませ、か
ら後の手裏劍一本が的を外れたのでございませ、餘り可笑しうござ
いませ、から笑ひました、可笑しい時は笑ふもの、悔しい時は怒るもの、悲

藏 武 本 宮

十四
しい時は泣くもの人間喜怒哀樂はあり内でございませう「無ヤ高慢
事と言ふ奴だ其方は……」愈々無二齋が立腹致しまして突然腰の
一刀をスラリと引抜き「無己れ手打にして呉れるエイッ……」と云ふ
時に七之助は心得たりと後の方へ下ッて無二齋の後ろに立上りまし
た其時「アッ」と驚いて「無オヤ……コレ……」と云ふ内に後ろの方に
て「七父上さん之に居ります」無エー己れ親を嘲弄致すかと云つて
又「候ヤッ」と切付けますと云ふと向ふへ飛び此方へ飛ぶ此時無二齋は
驚いて刀を鞘にヒラリと納めまして「無コレ……待て……七之助待
て七へー無オー其方は何時の間に其早業を何として覺へたぞ
七父上さん之は覺へたのではございませぬ私の身体に備つて居りま
するものでございませぬ是迄は吉岡無二齋も唯だ子供とのみ思つて居
りましたが今日茲は於て自分が刀を執て立向つたは唯だ稽古ではな
く全く親を嘲り笑ふたと云ふ所から平生忍耐の強き無二齋先生でも

藏 武 本 宮

早く言へば虫の居所が悪かつたので立腹致して全く此七之助を唯だ
一刀に掛けやうと心得ましたそれを体を交して彼方へ飛び此方へ飛
びするのは是れ全くの腕前ありと始めて我子の七之助が舉動に感心
致しまして遂に是より吉岡無二齋晝夜の差別なく此七之助を側に置
て劍道の事を悉く教へます又一を聞いて萬を知ると云ふのが此人の
器量であります實に梅檀は二葉より香しく蛇は寸にして其氣を吐
くと云ふが是れ後に天下に名人とあります幼名七之助後に此人宮
本武藏政名とあります之は成長の御話し初め子供の御話を餘り
長く辨じて置きますと皆様方が芝居狂言又は講釋杯を御聴き遊ば
したお馴染みの所が出来ます故是より七之助が成長を致して武藏と
あつて諸國の劍道者と立合の物語りに移ります

第 二 回

茲に有馬喜平治一陽軒信賢とヤす人がありまして之は有馬流とナシ

宮本武藏

ますナカ、剣道の達人でございます。年来諸國を修行致しまして武術を磨き、此頃姫路に参りまして道場を開きました。元來名譽の人でございます。いませる故、姫路の家中を始め近郷近在に至るまで其名を慕ひ、まして入門する者、澤山ございます。忽ち道場は繁昌を致して、門人も二百餘人になり、人々先生々々と尊敬致して居ります。然るに餘り繁昌致しますから、喜平治少しく慢心を致しまして……人間も餘り人に貴とされ、ますると慢心を致して宜しくないものでございませうが、之は多くあり、内でございます。自分がエライと云ふ氣にあるから宜しくない人に愛を受け、辱けるは辱けない人、又尊敬されるは嬉しいと云ふ氣が出れば宜しいが、爾うでない。此方らがエライから人が乃公を敬つて來ると斯う云ふ皆、天狗心が出るものでございませう。喜平治も慢心を致しました。から道場の表へ札を掲げます。のに、日下開山、劍法の元祖と立派に書表はしました。尤も其昔しは皆看板を掲げましたもので、人呼で金看板杯と

宮本武藏

す。只今の所謂商標で、矢張、劍家が斯う云ふ事を致しました。近頃、金座通りへ往つて見ますと、驚く勿れ、煙草税金三十萬圓と云ふ大變な事を書いてある商店があります。アレは田舎者が來て表を見たら驚かせう。實に大したもの、併し是等は餘事でございませう。斯くの看板を喜平治が掲げました故に、諸人目を驚ろかしまして、何うも大した物だ。有馬さんが立派な看板を掲げた表札を掲げたと云つて、夫れを態々人が見に参る位中には、心ある人は何れも有馬さんがアンナ看板を掲げなくとも、固より劍術は、達人だ。と云ふ事は、知て居る。アンナ看板を掲げると却て、彼の人の器量、下がる杯と云ふ人もございませう。之は全くでございませう。然る所へ、吉岡無二齋の次男、七之助は、用事がございまして、此邊りへ参ります。と表に人が立つて居ります。故に、ヒョツと見ると右の看板でございませう。後の方に七之助が之を見て、七、日下開山、劍法の元祖……エライ事が書いてあるな……と云つて笑つて居る。

藏 武 本 宮

前に居た人が ○「オイ、何を前さん笑つて居る 七可笑しいか
ら笑つて居るのさ △「何か可笑しいのだ有馬さんは日本一の先生日
下開山劍術の元祖なんだ七之助は其人々に向つて 七「オイ、皆さ
ん方斯様お投機師の看板を見てお驚るさあすつては往けさせんよ
□「何だ投機師の看板とは…………… 七「ハ、ハ、何も日下開山杯と書か
くても宜さうさものだ斯う云ふものを見て驚くやうな方が深山あ
るのは誠に困つたものだ ○「何だ生意氣な事を子供の癖に言ふさ」
悪口を言ふ者もあり又褒める者もある其中又七之助は一人笑ふて立
歸りまえたのは香勝寺と云ふ寺院でございませす之は親の無二齋が香
勝寺の住職に頼んで悴に學問を教へて貰ふ爲に七之助は此寺へ参つ
て内弟子に相あつて居ります事故其寺へ立歸りました其夜に至り
御住職が寝て居りましたのを幸にソツと筆墨を携へて抜け出で又候
有馬喜平治の門前へ参りましたモウ夜は更けて往來は跡絶へ沈どし

藏 武 本 宮

て居ります、マダ夫丈に丈がございません子供の事故に何か足糞の
臺をど見ると向ふに天水桶がある之を幸ひ踏臺と致して彼の看板の
上へ持て参りました達筆に黒々と井中の蛙大海を知らずと記し其側
らに筆者野村香勝寺内吉岡七之助と書終りまして其塙を立て仕舞
いたしました、切夜が明けますると此門前に大層人が立つて 甲「ヤ太郎兵
衛さん見さつしやい又何かナンだせ有馬さんの看板に餘計な事を書
足したせ 乙「ム、何か書てある書てある 丙「それじやア又エライ事
をお書きなすつたんだらう…………… 丁「農民が五六人集まりましたが扱字の
讀める人が少ない、只今は有難い事に學校をお設けになりました故モ
ウ子供衆が文字をドン、讀む昔しは手習い師匠がありましたもナ
カ、爾いう教育が届きません故に讀めぬ者が多い、「モン、何
と書てあるんです 乙「へ、左様でございませぬ、分りませぬい
丁「甚兵衛さん説で見さつせい 甚「サウさ、白濁で用ゐると云ふんだら

う 丙ろりやア前藥の能書じやアないか杯と言つて居る内に有馬喜平治の門人が何か表が騒々しいから飛出して見ると驚いた立派な看板の上へ黒々と書いてございませうに依つて匆匆に門人は中へ馳込みました 門先生大變でございませう 喜何だ…… 門御覽遊ばせ表札へ悪戯書をした者がございませう 喜ナニ悪戯書を…… 喜平治立腹を致して表へ飛出して見ると 喜何々井中の蛙大海を知らず…… ヤッ怪しからん事を書く奴かな…… 筆者野村香勝寺内吉岡七之助…… 一之は悪戯書をした者の姓名まで書表はしてある憎くい奴である有馬喜平治は大層立腹致しましたが兎も角之を諸人に見せては耻ありとて直ぐに看板を外させましたサア見て居た表の人々は 甲太郎兵衛さんマア甚太い事を書いたのう 太誰だ…… 甲彼の吉岡の坊ちやんじや 太ムーそれじやアなにか彼の香勝寺に居て學問をして居さつしやる七坊さんか、彼の坊さんけ實に悪戯見じや何と云ふ事を

書たんだ 甲井中の蛙大海を知らずと書いた 太ムー成程之はナンだき自己の考へには有馬さんが自分一人が學劍家じやと威張らつしやるに依つて左様な事を書いたんだらう之はドエライ事が出来たマア併し自己達が係り合にあつちやアならんから戻らうではないかと其儘にして農民共は立戻つて仕舞いました扱此時有馬喜平治は往來の者に之を見られて自分の耻でございませうから烈火の如く憤つて居る其處へ又門人共が打寄りまして 甲時に井上さん何うしたもんだらう 井左様師匠の悪口をしたる奴吉岡七之助と云ふ彼りア無二齋の次男ださうだ 甲ヨシ…… 彼れを引摺んで之へ連れ参り先生に手打にして貰はうじやないか…… 先生如何致しませう 喜如何にも憎くい奴匆匆に其者を連れ参れ 門人畏りましたと門人達が五六人はより野村の香勝寺へ参り立關に奈つて案内を願ひますと取次の小僧さんそれへ出て 小ハイ何でございませう 門人我々は有馬喜平次の門

藏 武 本 宮

人に致して井上勝太郎近藤源平林庄三郎山口金助何うか御住職に
目に懸りたい 小「ハイ、只今御住職はお不在でございますが何の御用
でございますか 門人「エー手前如き小坊主に用事はさし 小「之はし
たり小坊主に用事はないと仰しやいましても師匠様が御不在の時は
私がお取次を致します、維合お武家と雖もお控へなさい坊主出家は長
袖の身でございます 門人「ナカ、小僧威張つた事を言ふはい、此寺に七
之助と云ふ奴が居るか 小「青岡の次男七之助殿は入塾してお在な
います 門人「生意氣な事を言ふ奴だ……居るか 小「左様でございま
す 門人「其七之助を之へ呼出して呉れ、小僧は與へ参りまして 小「七
之助さん……吉岡さん 七「何だい 小「今彼の有馬喜平治殿のお弟子
が出入來になりまして何か貴下用があるかと申します、笑いまがら七
之助は玄關へ出て参りまして 七「エー皆さん何か用ですか 門人「
其方が七之助と云ふか 七「黙らつしやい、其方打とは無禮な一言人の

藏 武 本 宮

姓名を問ふには最初自分の姓名を名乗り賜へ 門人「ヤ、高慢な事を
言ふ奴だ……とは言ふもの、理の當然でございすから我は誰我
は誰と一々名乗ると 七「如何にも拙者は吉岡七之助でござるが何か
用か 門人「其方昨夜師匠喜平治先生の伊表札へ對して悪戯書を書
したな 七「決して悪戯書は致しません 門人「否、や悪戯書に違ひない
七「ハ、アして見ると貴下方はナンですか有馬様のお弟子さん達で
ございすか 門人「左様…… 七「弟子は師の半分に至らぬいと云ふ彼
の文字が讀めませんか井中の蛙大海を知らずと書いてあるを……
門人「左様でござる其通り書いてござる 七「それじやから悪戯書では
ございせん 門人「ナ、悪戯書でないと申すのか 七「左様有馬喜平
治殿が日下開山劍法の元祖とお書きなさいましたか 日下開山はナカ
貴とい文字又唯だ劍法なら劍法で宜しいが元祖とは何事でござ
る、貴下方は元祖の文字を抄存じないか藪豆や焼芋の看板のやうな食

藏武本官

物の元祖とは違ひます日本は武國あり武術を以て是とあしめます此國の武術の元祖とは何事ぞ世間を知らぬにも程がある故有馬喜平治様へは忠告の爲に井中の蛙大海を知らずと書いたのでございませす悪戯書ではない有馬喜平治殿へは諫言申した併し諫言は耳に逆ふ良薬口に苦しと云ふ事故に却てお分りがなくば仕方がない馬の耳に念佛とは是等の事か……門人「ヤ、已れ言はして置けば様々事言ふ奴だ、サア手前共と諸共に匆匆道場へ参れ 七有馬殿は用があるなら此方らへは入來下さい 門人「否や手前を連れて來いと仰しやるから早速連れて参る 七宜しうござる、只今参りませうと云ふ處へ香勝寺の住持がお歸りにありまして見れば何やら玄關にて七之助と侍士五六人と押問答尻目に懸けてお住職庫裏の方へお這入りになりお弟子を呼で 住何事だ……弟子「お師匠さん大變です彼の七之助殿が昨晚有馬喜平治殿の表札へ悪戯を致したと云ふ事で……住それは

藏武本官

今俺が空兵衛さんから聞いて來た 弟子「其談判には入來さすつて今七之助殿が連れて往かれる處です 住困つた事を致したはい……お住職は玄關へ出ました 住扱各位には光づ何うぞ之へお通り下さい、愚僧が香勝寺住職でござる 門人「ア、お手前がお住職か、此七之助はなにかお手前の門人か 住左様出家ではございませんが學問の修行を致したいと申して居れば此親無二齋と少しく縁もありませす愚僧故に學問を教へて居りました何を致したか存じませんが何うか之は愚僧が此者に代つてお詫をする見らるゝ通りまだ幼年、ヤモウ兎角に悪戯見であつて人様に對し折々失禮を爲します故常に戒めて居ります併し門人の罪は師匠にあり愚僧がお詫をするに依て何うか御勘辨に預かりたい 門人「否や勘辨相ありません外の事なら卒知らず今日劍道を以て諸人へ之を教へて居る者の表札へ悪戯書をされたのは此上もさき師匠の汚辱師匠喜平治殿が強て連れ参れどのお言葉であ

る故に此七之助は是非共連れて参る再三詫たが何うしても聞入れな
い此時七之助が「アイヤお師匠さん心あき者は致し方がござらん
住「コラ」何を言ふ 七「私が参つて喜平治殿の前にて詫をするなら
充分詫を致します、心配あるな、お師匠さん、佛法の事に就ての論
らばお師匠様がお扱かひあさるのが道でございませうが今日は劍法
の論に致して坊主出家の知らざる所、學問はお師匠様より學びます
が劍法は親無二齋より學んだ七之助は心配あるな、有馬喜平治殿は道
場へ私が参つてお詫をしますから……」 住「併し時として事に至るも
許り難く……」 七「其儀は必ず心配ある、父上の許へお知らせ下さ
る事、無用と此言葉は實に十五歳未滿の者とは思はれませぬ、悠々
して支度を爲し有馬喜平治の門人に連れられましたして其道場へ乗込で
來る、是から有馬喜平治と七之助の問答聞かずんばあるべからず否
ますんばある可らざるの講談

第三回

扱香勝寺の住職は此事に就て太く心配を致しまして兎に角子供一人
を有馬の道場へ遣はす譯にはいかず、何うがなして事を治めたいと考
へて七之助をそれへ呼び、住「誠に、お前は飛でもかい悪戯を致した
七「イエ、お師匠様悪戯ではございませぬ、ア、云ふ無禮な奴があります
ると棄置かれませぬ、又依つて私が落書を致しました、何も心配に及び
ませぬ、是から私は彼の道場へ参ります、住「イヤ、お前を遣は
かん、愚僧が兎に角往て來る暫時待つて居れ……」ソコでお住職一人有
馬喜平治の道場へ尋ねて参りました、此時喜平治の弟子三四人居りま
して、門人「サア、住職此方へ通らつしやるやうに……」先生「只今
住持が参りました、喜「ナニカ其七之助とヤする者を連れて來たか
門人「イエ、一人参りましたよ、喜「兎に角、ア之へ通せ……」お住職は事
郎寧に挨拶をいたしました、が有馬喜平治は横柄な人ですから、碌に挨拶も

藏 武 本 宮

せず 喜住持彼の七之助と云ふのはお前の弟子であるか 住左様、
 か彼の親と縁がありまして愚僧の許へ來り修行致して居ります 喜
 ナニカ傍身は坊主の分際にて武術を教へて居るか 住、イエナカ、
 武術は教へません 唯だ學問のみ修行致して居ります が此度先生の
 道場表看板へ彼が何か悪戯書を書いたと云ふ事誠に以て恐れ入り
 ました何うぞお許し下さるやうまだ漸う十三歳の幼年でございます、
 誠に修行を致して居る内にも今迄寺子も取りましたが彼の様も悪戯
 な子供を取たのは愚僧も始めて折々小言を申しますがイヤモウ更に
 聽入れません 實は親許へ歸さうと心得て居る場合何うか愚僧に免じ
 修勘辨に預かりたう存じます 喜否や勘辨相なりませんが十三歳の幼
 年と雖も其書方は井中の蛙大海を知らず杯と記したのは是れ小兒に
 あるまじき事である年齢は十三歳と雖も爲せる事はナカ、大人も
 及ばん位な悪戯を致した是非共お連れ下さい 住然れば何うか有馬

藏 武 本 宮

殿、只今連り参りまするに依つて何う不充分小言を言つてお許し下さる
 やうに又武門の事故彼れを一刀に打果すとか木劍を以て打懲らす杯
 と云ふやうな事に相なつては誠に手前も彼の親より頼まれて居るも
 ので平生手前の仕付けが悪いと云ふ事になると自然と之が市中へ廣
 まり香勝寺へ學問の修行にやり或は手習ひに遣つても師匠の仕付け
 が悪い杯と云ふやうな事があつては誠に難儀を致す事でございます
 から何うか此儀は平には勘辨に預かりたい願りと詫を致しました
 喜、兎に角マア宜しいからお連れ下さい 又手前も有馬喜平治だ小兒を
 捉へて立合を爲し又は首打果したりと雖も有馬喜平治の譽れになる
 事でもござらんから……宜しい兎も角もお連れ下さい 住、弟子の不
 埒は師匠の仕付けが悪い故彼の罪を引受けてお詫を致してもお聴受な
 くば致し方はございませぬ 只今連り参ります 何と言つても有馬喜平治
 が承知致しません故に據るなくも住職は寺へ戻つて参りまして 住、

蔵 武 本 宮

サア〜七之助よ之へ参れ之へ参れ……七「お師匠様如何でござい
ました 住、大きに困つた事が出来たよ、お前がアン事をしたに依りて
何うしても有馬殿が承知が有い、お前を連れて往かなけりやアあら
んから支度をあさい能くやし付けて置くが先方へ参つたら事無様に
お詫を致して宜いかムーン……決して向ふへ参つて無法な事を言ふ
てはならんぞよ 七「委細承知致しました衣類を改めさせお住職は七
之助を連れて有馬の道場へ参ります、誰言ふとあく之が知れまして其
近所では「〇オイ〜大變だ大變だ彼の有馬さんの石版へ井中の蛙
大海を知らずと書いた香勝寺に居らつしやる七坊さんが今日は有馬
さんの道場で切殺されるんだ △爾うだ今香勝寺の和尚様が連れて
往かつしやると云ふ大變だなア…… 丙「へーそれは大變だ可愛さう
じやアぬいかなア 丁「ナニ七坊さんが殺されるツ……チャア已れも
見に往かう已れも見に往かうと云つて一人二人三人四人とゾロ〜

蔵 武 本 宮

〜後から尾いて参ります、更に驚ろかぬ七之助は師匠と共に有馬の
道場へ参りますと聽て有馬喜平治は 喜「サア住職此方らへ通らつし
やい……コレ井上、道場へ通せ…… 兩人道場へ通りますと喜平治は小
刀を前半に手挟み大刀を左の手に提げて道場の一段高き所へ立出で
喜「七之助と申すは手前か 七「左様でございます 喜「不屈き者め、何
故道場の金看板へ悪戯書を致した 七「恐れ入りましたお許し下さい
喜「恐れ入た許して下さいと云ふ其挨拶を致す位ならば善悪は心得て
居るであらう、已れが悪いと思へばこそ恐れ入たと云ふのであらう、
れを心得て居ながら無禮な事を爲す、勘辨相ならん、七「ハ、ア先生、
勘辨下さらんければ何うなさいます 喜「オ、汝の首を切落して呉れ
んに依りて覺悟を致せッ…… お住職は震へ出して 住「之リヤア大變だ
……コレ〜マテ七之助飛でもあいな事になつた……何うか有馬殿、
勘辨に預かりたい、愚僧が重々謝罪るに依りて勘辨に預かりたい、預り

藏 武 本 宮

と詫を致しますから 喜「アア」待たれよ住職、身に罪はあらず……
それでは七之助ナニカ手前は此喜平治へ對して手向ひをするか 七
手向ひは致しません、貴殿が首を切ると仰しやれば據るござらんから
首を切られませう、併し先生貴殿が私の首を打劔ると仰せられても、そ
れではお切あさいと云つて首は差伸べません、罪人が上役人の手に
繋つて捕押へられ打首に相なる時は身に寸鐵を帯びず殊に已れが罪
あるに依つて首を切られる事を覺悟致して居ればこそ首も伸べやうが
元々斯く申する七之助は已れが悪いとは存せん、其首を刎ねやうとせ
られるは身の邪しま、お相手に相ならう 喜「ナニ言はして置けば雑言
過言憎くい奴サア来い」と喜平治は大刀を提げて道場へ下りました、そ
りやこそ事に至つたりと道場の窓から覗いて居ります人々は何う
ある事かと片唾を呑で控へて居る、此折門人共十二三人心地宜げに左
右に控へて居る、七之助は住職に向ひ 七「お師匠様決して浮心配ある

藏 武 本 宮

な、打たれれば夫迄の事向ふで切付けるのを其儘に首を差伸べては切
られせん、私はお相手をする積りです、此折喜平治は「エイ」と掛聲を致
して大刀スラリ引抜いた、ソレ七之助が切られたと思ふと斯は如何に
ヒラリと後へ飛下つた、お住職は七之助が身には脇差一本所持致して
は参らんと思ひさや何時の間にか懐中に秘したる僅か一尺二寸の
木劍を取出し有馬喜平治が大刀引抜きました途端に後へ下つて身を
構へました、隙さす喜平治が切込で参るのを受つ流しつ致して彼方に
飛び此方に飛ぶ七之助の其早業と云ふものは實に眼にも留らぬ程の
早さにて住職を始め并居る門人見物人迄も驚いた、有馬喜平治も此時
嘆息致して居る所へボン／＼ 七「エイヤッ……」と云ふ氣合を入れて
喜平治の手許へ這入ると見へまするが否や突然喜平治が右の二の腕
を 七「エイ」と打つ 喜「南無三……」と喜平治が後へ下らうとする内に
何かは堪らん木劍と雖も後に至て日本國內に其名を擧げる宮本武蔵

藏 武 本 宮

政名幼名の折から致して是れ凡骨を脱れて居る腕前の七之助に打たれ、またした事故手が癩れて有馬喜平治刀を其處へ取落して、喜、残念……と云つて拾はうと致しました處を眉間の邊りを彼の木劍にて、七、エ、と打つ、何かは堪らん喜平治は腦骨碎けて仰向けに其處へ倒れ唯だ一打にて息は絶へました此有様を見るより多くの門弟等は「斯は重兒なりとて油断はならず、それ打取れよ」と一同又拔連れて七之助を追取巻くを少しも動せぬ七之助は「七、ア、イヤ、門人衆、此有馬喜平治殿は先刻より手前が詫ると雖も聽容れず無禮な振舞い、過つて改むるに憚かる事勿れ再三詫れば許して然るべきに然はなくして手前如き十五歳未滿の少年に向つて真劍立合杯と云ふ心得違ひ、夫故斯く怒らしめた元より真劍を以て手前に切付け手前が受損じたら此七之助は一命を損すと云ふ已を得ぬ場合、身体を護るが爲に向ふを打ち、手前に打たれて相果てたる有馬喜平治殿、これにお手前等は敵打と心得て手前を

藏 武 本 宮

打たう杯とはお心得違ひなり、其處退かずや」と云ふ聲は宛然百雷の一時に落しかと思ふばかり、表に居りました人々も事の意外に驚ろき、香勝寺の住職も膽を潰して「そら大變だ」と其儘に此處を逃出しました、七之助は大勢の門弟を少しも恐れは致しません、今此處で彼是して居る内に香勝寺のお師匠様が若し向ふの手に捕へられでもしては師匠へ對して相濟さんと心得て「七、お師匠様は心配あるか……サア一同の者よ此七之助を打ちたくば速かに香勝寺へ參れ、併ながら先づ有馬喜平治の死骸は片付ける師匠の耻は門弟の耻あり」と右左から來る奴を彼の木劍にて丁々發矢、丁發矢と打据へましてお住職を突然脊負つた、十三歳と雖もナカ、力もある、お住職は驚ろいて……門人共が真劍を持って追驅けるから震へて居ります故「七、何も沙心配あるかと逸足早く驅出しました、此折有馬の門人達はそれ逃そなど大勢追驅けて往く、先刻より道場の窓から覗いて居つた人々は「サア見る有馬

藏 武 本 宮

喜平治が大變を看板を懸けやアがつてトウ／＼十三にある七之助さん打殺された宜い氣味だ」と云ふのでワウワツと騒ぐ扱吉岡七之助は香勝寺の住職を肩に引懸け飛が如くにお寺へ歸らうとして参りました處へ後からは大勢有馬喜平治の門人が追駈けて来る凡る道の三四町も来ると向ふより供廻十二三人召連れまして鎧を一筋立させ乗物にて來たる人があります此騒ぎに惣籠の内にあつた一人の武士が武士一同何事が出来致したか惣籠に居つたる一人の若党が「若ハッ……向ふより何か一人の坊主を脊負つて子供が駈け参りますを後より大勢追駈け來たるやうでございます」スワ何事が出来と惣籠の内より出でましたるお武家は之なん宮本武左衛門とやする方方に致して後に此武藏の勇にあられる方方でございます武藏の暗み鎧を執て相待ちます處へ此七之助が馳参りまして「七アイヤ其處へお出でに相なつた方方は何れの仁にて候か私は吉岡七之助とやする者有馬

藏 武 本 宮

喜平治なる者を只今真劍勝負に依て手前木劍を持って彼を討果しました然るに門人共大勢追駈け参り私一人あらば敵を引受けまするが之なるは私の學問の師匠香勝寺のお住職何卒義を見てせざるは勇なしとやら侍士の一分に依て師匠をお助け下されたし然らば拙者は後へ取て返し大勢の相手になるの心得何うぞ師匠香勝寺様を暫時お預かり下され」と其言葉の様子舉動萬端に感心致した武左衛門「武オ一扱は聞きつる吉岡無二齋の次男七之助殿か心得たり住職は確かに預つたは心配なく立派に立合をせられよ「七有難し」と存負つて居りました香勝寺和尚を宮本武左衛門に預け取て返して有馬喜平治の門人大勢を相手にしやうと云ふ茲に於て宮本武左衛門如何なる取計らいをして此場を治めまするか……之は武藏の書物にも宮本武藏が十三三歳にて有馬喜平治を殺したと云ふ事は歴然と出て居ります武藏が始めての働さ……武左衛門のお話しは次回に演じます

宮本武藏

此時宮本武左衛門は七之助の頼みに依りて住職を自己の乗物へ入れし
 した七之助も駕籠の側に居つて師匠を警固致さうと心得て居る内に
 大勢間近く追迫りましたから猶豫なく自分は大勢を相本に切死をす
 る量箇然るに前やし上げた通り懐中に秘え持たるは彼の木刀でござ
 います其劍ではございませぬ故に宮本武左工門に向つて七之助に卒
 爾な事を頼つて恐れ入りますが小刀を拜借致したい 武オー心得
 たりと武左衛門が小刀を貸與へました左には木刀右の手に彼の脇差
 を執つて後へ引返さうと云ふ時に武左衛門は「暫く待たれよ七之助殿
 血氣に搦るは匹夫の勇である先方より來たるまで此處に待つて居れ
 七左様でござるかど云ふ處へ有馬喜平治の門人の内井上佐太郎近藤
 久馬の二人が二人アイヤそれにおいでなさるお武家只今之へ坊主
 を一人脊負ふて少年の者参りしか如何にお見受けやせば其駕籠の内

宮本武藏

へ一人をお匿しあるは様子サア速かにお渡しあれ 大勢爾うだ爾う
 だ若し無法事言掛けるあらば其お武家こそ相手ありと二人
 三人と段々集まつたる門人が大音を上げた故堪りかねて七之助が駕
 籠の後ろから出やうとするのを武左衛門之を押止め 武斯は怪しか
 らん一言慮外千萬なるは一言只今何かは知らん之へ來つて助け呉れ
 どやするに依りて助けた窮鳥懐いに入る時は獵師も之を獲らず助け呉
 れと言はれたに依りて侍士の一分を以て助けたお手前達は何人である
 が 門人我々は此邊りに道場を出して居る有馬喜平治の門人只今師
 匠喜平治事童兒の爲に打果され残念でござるに依りて師匠の仇討に参
 つた、テ身は何處の仁であるか 武ハ、ア有馬喜平治殿はナニ
 カへ然らば只今一人の僧を脊負ふて來たる少年の爲に討たれたと仰
 しやるか情けなき處の劍術の指南者かな夥多の門人を取立てる者が
 兒童の爲に打たれる杯とは誠に以て柔弱千萬…… 門人アイヤお殿

藏 武 本 宮

り召され師匠の悪口は聞くに及ばず、サア何うしても其坊主と小僧を
お出し下さらんければ貴殿がお相手あり、ソレツと云ふ間も亦く四十
何人宮本武左衛門の周圍を追取巻きました、お住職は駕籠の内では
怪しからん事にあつた、七之助の爲に此お武家まで御儀をささるか
スワ大變なりと心配をして居る、七之助は少しも驚ろかん、若し師匠へ
大勢の奴等が手向ひを致しきば相手にあらうと云ふ量簡にて相待つ
て居りますると此武左衛門が、武然らば各々へやし聞けん、手前事は
肥後國熊本の城主加藤肥後守家來に致して宮本武左衛門と申する者
なり、用事あつて此邊りへ参りしに、只今之へ來つて助け呉れどの一
言に依つて助けたり、強て各々が相手とありたくば速かに是さる宮本武左
衛門お立合やさう、門人「ナニ熊本の宮本武左衛門と……聞くより門
人共少し恐れまして一人も手を出す者なく一人下がり二人下がりす
る、其内武左衛門の駕籠の後ろに居りました七之助は、七宮本先生、彼

藏 武 本 宮

の門人共は貴殿へ對して無禮な一言モウ此七之助覺悟を致したりお
止まり下されと出やうとするから武左衛門が「マア待て斯くまでや
しても分らんか……サア有馬喜平治の門人卒で此上は此住職と七
之助なる者を助けた宮本武左衛門がお相手にあらう、若黨兵に於きま
しても主が主から來家が家來、何れも其勢ひ猛くサア來い來れ」と各自
に刀の柄へ手を掛けた、如何にも加藤肥後守と云ふと大したお名前で
ございまして其は家來の宮本と云ふので有馬喜平治の門人之は敵は
んど一人減り二人減り蜘蛛の子を散らす如くに何處へか逃去て仕舞
ひました、此時武左衛門は大口開て打笑ひ、武「アレ見られよ、住職有
馬喜平治の門人は拙者の一言に驚ろいて逃げ去ると云ふ……ナニ彼
れしきの徒が百名参らうとも二百名参らうとも此武左衛門驚ろきや
さん少し手前の廣口かは存せんが……」と云ひさま仁王の如く突立ち
上りし有様は實に三國の時燕人張飛が敵の大軍を退ぞけたる時も斯

藏 武 本 宮

くやと思ふばかり其狂勢に恐れて皆追々に逃去りました扱武左衛門は「兎に角此駕籠で香勝寺とやらへ擔ぎ込で……お住職をお助けやした以上は何處迄も涉替固やさう」と言へば七之助は「イヤ〜モウ是にて宜しうござる 武今一時お助けやしても萬一彼の卑劣の連中が途中に待つてお住職へ如何様か事を致すかも知れん取急ぐ旅ではござらんからお送りやさう任職は此時に武左衛門が親切を悦び遂に駕籠に乗せられたる儘香勝寺へ参りまして其内にモウ日も暮れて仕舞ひました彼方ら此方らでは大評判……扱お住職は寺へ立戻りまして是から宮本武左衛門先生を悉く尊敬致して響應爲します 武何うぞお構ひ下さるお 住何は兎もあれ一時當寺に在つて伊休息を願いたい」そこで武左衛門も夜分にも相ありましたる事故に 武宜しい兎に角今晚は當寺に伊厄介に相ならうと打寛いで居りまする處へ此一件を誰が知らせましたるか當時新見村に居りまする處の吉岡無二

藏 武 本 宮

齋儀たゞしく香勝寺へ驅來つて見ると門内には一挺の駕籠があり又若黨も二人ばかり居りまする故驚るいて扱は悴七之助はトウ〜有馬喜平治の爲に打果されたのではないかと心配を致して寺内へ這入るを七之助親の姿を見るより早く飛出で、七、オーお父上……無コラ如何致した 七、只今宮本先生の爲に助けられお住職と共に此寺へ無事に立歸りました 無ナニ熊本の宮本武左衛門先生と直ぐにお目通りを致さん……と進み入る住職は住職で「マア〜宜うお入來おされた無二齋殿モウ實に伊子息の悪戯には困つたもの成べくは貴殿のお耳へ入れまいと心得て居つたのに…… 無イヤ〜只今農民共の話しを聞いて心配旁々是まで参りしが兎に角武左衛門先生に伊面會致してお禮を下さう是から宮本武左衛門に始めての對面尤も互に名は知り合つて居りまする中故一通りの挨拶済み 無手前事は瘦浪人吉岡無二齋とすする者 武之は痛み入たるお言葉加藤肥後守

藏 武 本 官

家來宮本武左衛門、涉子息七之助殿のお働き實に感心致したナカ、少年とは思はれません。無イヤ武左衛門殿七之助はモウ私の作でござらん勘當致しました、ヤモウ七八歳の折から致して動もすると親へ對して手向ひするやうな振舞を爲し、已れが少し小力のある處から思戲は固より何かの事が粗暴でござる、遂には彼奴は人を害し……殊に今聞けば有馬喜平治殿をトウ、討たど云ふ事人を殺したる者は我子でござらんモウ勘當致しました、……コレ七之助其方は速かに此處を去て仕舞へ、それとも親の前に於て切腹を致すか、追られたに依つて七之助も「之はしたりお父上、有馬喜平治如き奴が彼のやうな看板を出す時は今お父上は世を棄てお仕舞ひなされ武術もお棄てなされたと雖も吉岡流と一派を開いたお父上が此邊りに居るのに有て無きが如き喜平治の振舞ひ、憎い奴でござるから……無ヤ猪口才な事を汝少年の分際ですするか、親子の押問答の中にも親は親子は子なり、何と

藏 武 本 官

く愛情の溢るゝを察した宮本武左衛門「それでは斯様なさい無二齋殿暫時涉子息は此武左衛門がお預かりやう、今勘當すると仰せられた處がマダ、十五歳未滿ナカ、お智慧もある今のお言葉一人此儘追放すると雖も天無祿の民を生せず何處へ參つても十五歳にもあらば立派な主取りも出来る涉身分じや、けれ共此儘追放すは不憫じや、兎に角武左衛門がお預かりやうと云ふのは有馬喜平治の門人がまだ大勢あるに依つて萬一其者が集まり又此七之助殿へ對して如何様か害を加へるかも知れんから寧ろ國を隔つたる熊本へ連れ参り夫から先きは此武左衛門の胸中、何と無二齋殿勘當をしてモウ親子でないど云ふ一人の子をお棄なされる位ならば此宮本武左衛門にお預け下さる思召しはないか、それを聞くより側に居た香勝寺も「ヤ之は誠に以て宮本先生のお扱かひ、私も暫時此寺へ置いて充分に學問もさせたいが兎に角後難を恐れるに依つて之は左様なすつたら宜からうと思ふ此

藏武本宮

處で直に話しは極まり吉岡無二齋は「うれでは何うか武左衛門殿お頼みやす、モウ武左衛門殿へお頼みやすした以上は此後七之助が何か心得違ひがあつた時は斯く致して下さいと勿々に筆を取出して白紙へ書て差出したのは

第一箇條 悴七之助事貴殿へお預け申せし以上は親に代つて充

分には訓誡の上天晴れ武者に相ある様御指南被下度事

第二箇條 愚鈍ならば奴僕にして使被下度候事

第三箇條 人倫の道を犯したる時はお手打不苦候事

此三箇條を書いて宮本武左衛門に渡し無二七之助其方は勲當を致した子だに依てモウ言ふまでもないが此三箇條を守り武左衛門殿を親とも思ひ主とも思ひ萬事を慎んで教を受けよ……却て長居をしては……と云ふのは兎に角一時は親子の分れにある事故氣丈とは言ひながら七之助が別れの際に落涕でもしてはあらんと吉岡無二齋は

藏武本宮

匆々にして武左衛門に分れを告げて表へ出る後見送つた七之助アイヤ親上……と云ふから無待て、モウ此無二齋は父では無い併し親子と名乗りたくば宮本先生の許にあつて今までの無謀赤心を改めて人間とあらば又親子の名乗も致する……萬事は宜しくと言葉を遣して悠々と出で往く姿を見送つた宮本武左衛門は先づ今日日本に於て吉岡無二齋の如きは眞の侍士であると屢々後を見送りまして是より庫裏へ來り香勝寺の住職と種々の雑談圖らずも常所へ來つて武左衛門が吉岡七之助と云ふ豪傑を一時預かり、マタ此時は自分の養子にするまでの心はございませんでしたか縁は不思議なもの是从から宮本武左衛門が彼の七之助を遣れまして肥後岡熊本へ立歸り其内ッヒツヒ其情愛に絡んで七之助を宮本の養子と相さし宮本の姓を名乗り武左衛門の武の字を取て武藏即ち武藏と改名を致す、是までは子供の内のお話しですが追々看客諸君のは存じの名高き鍋蓋の立合或は箱根

第五回

山の狼退治又は姫路のお天守改め杯と云ふ面白きお話に移ります
 儲此一回は佐々木岸柳のお話に移ります是まで宮本武藏のお話
 しは講談又は種々の本にも出て居りますが肝腎の左々木岸柳の歴
 歴が詳しく出て居りません故に之を演じます此左々木岸柳は宮本
 武藏に劣らざる豪傑であつたさうでございませすが風としたる事
 り武藏の實父無二齋を打ちましたから後に武藏に打たれます而し
 て此ガンリウと云ふ劍道者は二人あります一人は寛永の年間に小石
 川白山下に東軍流の達人石川軍刀齋巖流一人は佐々木岸柳吉高と
 します劍道名譽の人でございます今此岸柳の由緒を尋ねますに永
 祿年中近江の守護職佐々木六角入道承禎と云ふ方に一人の妾があ
 りまして名を松ヶ枝とす生れは出羽國最上在の者で至て美人でござ
 います承禎常に此女を愛し此女も亦至て心掛けの宜い者で能く承禎

宮本武藏

宮本武藏

に仕へて居りました其内に一人の男子を設けましたから承禎大に喜
 んで名を久三郎吉高と附けました之が即ち後に岸柳でございます中
 には佐々木岸柳を高の知れたる浪人だ杯と云ふ事を今迄申して居り
 ましたがナカ／＼左にあらす斯の如き立派な人の胤でございませ
 るに承禎足利將軍義昭公に背きましたから義昭公は尾州の織田信長
 朝臣を頼み六角承禎が籠り居る江州觀音寺の城を攻させました承禎
 如何で織田の猛勢に敵ふべきや之は逆も往かんと考へて永祿十一年
 九月十二日遂に城を明渡し其身を始め家の子郎黨に至るまで皆離散
 致して仕舞ひました其騒動大かたからず上を下へと騒ぎ立て家財を
 棄て逃るもあり老幼を扶けて逃ふもある其中に妾の松ヶ枝も據とこ
 ろあぐ一子久三郎を懐ろに入れて乱軍の中を漸うに連れ少々の金子
 を持つて故郷の方へ志して立出でました習はぬ旅とは言へ其心平生
 から豪膽でございますから女ながらも少しも驚ろく氣色なく出羽國

最上の片在所へ来りました然るに父は既に此世を去り今は唯だ母一人にて漸う細き煙りを立て其日を送つて居る處へ戻つて来りましたから母は實に夢かと思ふばかりに驚き又喜んで。母宜う戻つて来た松ヶ枝お前は近江とやら云ふ遠い國へ参り初めは賤しき奉公をしたさうだが今は大したお方のお妾にあつた云ふ事を聞き妾しも一盞は尋ねやうと思つて居た處、オー、それに懐て居るはお前の子であるか。松母上様之は六角様と云ふお方のお胤であつて妾が産み落したる此子名前は久三郎と申します。母、オー左様であつたか宜うことをア、……して何う云ふ譯で此度は故郷へ言はれて松ヶ枝織田の爲に云々の事にて滅ぼされたる一伍一什を話し。松、モウ是よりは此お子も仕方がない土民に落して仕舞ひたくはないが此片田舎で育てるより外はあいど云へば母親に於ても。母、鬼に角妾しの爲にも孫であるから是よりは何うがなして。お子三人其日さへ送つて往けば宜い

と云ふもの。松母様決して決心配なされまするな善への金子は、と一両程の金子を出しましたから母のお袖も大に喜び直に村長の許へ参つて此話しをする。と村長も之を聞て。村長、アそれは結構な事じや、ア何にしてもお前一人で食べる事も出来ぬ處へ娘どのが戻つて来さしつて加之孫までも連れて来たとあれば目出たい事、それでお前の所も又立派に立つ村の人々も皆助けて呉れまして不潔い家ではありまするが彼方を繕ひ此方を繕ひ漸う家も出来ました、父に今日と經ち明日と過ぎて一箇年ばかり居ります内に母親お袖は久々にて我が娘に逢ひ嬉しいと云ふ心の弛みか却て身体が悪くなりまして二月ばかりの患ひで病死致して仕舞ひました、松ヶ枝の歎きは大かたさらす、折角故郷へ尋ねて参り母親にも是からは安心させやうと思ひし甲斐もさく相果てましたから泣々野邊の葬送を爲し七日の追善も心ばかり勤めまして夫よりは我子久三郎の成長を樂しみに一日

藏 武 本 宮

と送りまするが外に財産もございませぬ故終ぎ洗濯人仕事廻らぬながら其日を送り何うか此久三郎は胤が胤故成長の後天晴侍士に致したい又運あらば一國一城の主人にもなれるお方と唯だそれのみを樂んで居りましたお話しは段々過ぎて久三郎十三歳にありました處が天性骨は太く力量は衆に勝れ才智も尋常でありませぬ故村の者は舌を巻いて居ります發端にも宮本武藏が未だ幼年にて七之助と申した頃凡人を脱れた勝れた人としましたが此佐々木久三郎も同様の人でございませぬそれですから後に岸柳島と云ふを遣した位で武藏が敵を討つ時にもナカ一通りでは討てませぬ双方共名人同士之の眞劍立合之は未だ至つて敵討に詳しく申し上げませぬ此久三郎も悪戯兒でございまして近所の子供達が毎日言付けに来る母親の松ヶ枝は「ア一誠に濟さん事でございませぬと詫を致して戻つて來ると頼りど小言を言つて何うかア一云ふ子供と交つて呉れるな途には土民

藏 武 本 宮

とあり又山へ還入つて獵師の眞似振をするど賤しい者になつて位餘ふと意見を致しますするが久三郎は未だ己れは近江國の守護職たる佐々木六角承禎の子と云ふ事は自分では心得させんと國人が十五歳にありました時松ヶ枝は風邪の心通で二三日寝ましたは何うも尋常の風邪でありませぬ故自分の心にも母親同様之が重うあつてモウ助かるまいと覺悟を致しましたる處から久三郎を枕邊へ呼びました久母さん今日はお心持は何うでございませぬ母オ一昨日に變つて今日は大分心持も宜い、マア鳥渡此處へ來てお呉れよ前打守りまして松ヶ枝は病に苦しき其中に蒲團の上に坐を占めて母久三郎今日はお前に話す事があるお前も最早十五にもなつたからやし聞かせるがお前は眞實の父の顔は存じまい産れて間もかく此出羽國最上の邊りへ參つて見る影もなき詫住居はして居るもの、是から後は彼の悪戯は度めて仕舞ふて劍道武術を學んで天晴れお人となつてお呉れ

久「母さんそれでは私の父上様と云ふのは。母「オー近江源氏の嫡流にて佐々木六角入道承禎殿の胤なる予や我が亡き後にても心を改め身を苦しめ文武の道を能く辨へ佐々木の家名を興し天下に名を揚げよ必ず父母亡しとて假にも悪き道を學び非道の心を出さぬやうにして呉れよ才智衆に勝れたりとて自慢する心を起し人を侮り又は驕り増長をしてはかりませんぞよ然すれば此世を去るとても草葉の蔭にて此母が喜んで居るぞよ又今やした一言を守らぬに於ては縱令死でも死切れぬぞよと久三郎の顔を見て潜々と泣く其時に腕拱いて居た久三郎「オーそれでは母様私は佐々木承禎様の子でありまするか此間村の空兵衛さんの話しに近江の豪傑佐々木六角承禎と云ふ人は信長の爲に亡びたと云ふして見れば母様其織田信長は敵……母「コレも未々其様な事をお前が言ふてはなりません宜いかやモウ之を言ひ聞ければ何も妾しは心残りはないサア此處に大切ある系圖があるぞ

差出したるは是れ即ち近江を去りまする時に六角承禎が呉れたる六角家の系圖の寫しと久三郎は紛ふ方なき我子ありと書た所謂龍書でございます之を渡しました時に久「ハ、ア左様であるか母様それを知らずして今迄土民に交りたり其子供達と遊んで居りましたが爾う云ふ事ならば是より私は武術を充分に學び天晴なる人となりまするに依て安心をして下されよ母様。母「オーそれ聞いて安堵したドリヤ一睡りやりませうと布團の上に横はりましてスヤ／＼眠るかと思ひさや時も入相諸行無常と告渡る最と物凄き鐘の音と共に母は段々息を引取る様子今布團の上にお坐りあされて我が身の素姓を悉く話して下された母上がヤレ訝かしの事やと側に寄りまして久「母様々々と呼べば両眼を閉いて二つ三つ點頭きましたたが之が此世の別れにて遂に松ヶ枝は病死致して仕舞ひましたサアモ豪氣の久三郎も茲には祖母さんに別れ今又母上に別れる事故泣より外はなく途方に暮れ

藏 武 本 官

て居りました其内に近所の人々も集まり来り 甲「アア〜久さん仕方がない母さんの死骸へ取違つて泣いて居たどて決して戻るものじやない早う甚兵衛さん太郎右衛門さん何うか檀那寺へ……乙「オ、それじやア俺が棺桶を買ふて来やう杯と手分けをしてそれは田舎の事ですから親切に彼方此方と奔走をして其明る日に葬式は仕舞ひさした何が何を云ふにも久三郎は未だ若年ですから近所の人々も一人二人宛代る〜来て世話をして居ります其内に七日〜の追善供養三十五日四十九日百ヶ日も過ぎまして後は何か其日の業をしなければ食べるにも困りますする故他人に連れられて山へ這入つて糧を食し又は人の使ひ杯を致して其日を送つて居りましたけれども前申し上げた通り素姓の正しき近江源氏の佐々木承禎の子でございします故に風と自分の思ふにも其日の穉きとは言ひあから賤しき業をして一生を暮すは残念だから一層の事剣道修行を爲し世に英勇と稱せられ父祖

藏 武 本 官

の家名を再び興し一國一城の主と成るべしと心に深く思ひ込み是より久三郎は孤兒なれども懼るゝ心もあく山に入りては木の枝を折取り木刀と爲し終口岩を敲き或は又大樹を相手とあして腕を固め又或時は峯に登りて身体を軽くなる事を勉め又は谷に下つて游泳の稽古を爲し斯く致まで月日を送つて居りました處が此久三郎が良き師匠と頼む人の出来たと云ふのは茲に出羽國山形の城主最上出羽守義房公は御大祿であらせられました文武両道にも暗からず上を尊び下を憐み臣を愛し誠に以て名君でございしますから御領分の人々も此太守を尊敬致して居ります然るに此御藩中に知行三百石を領す野田大膳と云ふ人がございします之は劍道の達人尤も最上家は武術が大府盛でございまして此お家に飯田播磨守武壽と云ふ御仁がございしました此お方は伊東一刀齋の門人で自ら飯田一刀流と名を置いた程の先生とれに肩を并べる野田大膳一家中の者共残らず此人を師として劍道を

藏武本宮

學び門人も數百人とさいます。頃は彌生の半ば山々の櫻は爛熳と咲き
ちまして宛然銀世界の如く岩間の露園は花を重ねて宛も毛氈を敷た
る如く管に其氣色は言葉にも述難い位、廣く彼方を見渡せば種々の花
が野に満ちて咲て居ります。又向ふを見ますと千歳山と云して之は
俗に出羽富士と云ふ能く富士の山に似て居ります。其千歳山の麓には
一流の川があらます。之は矢張り最上川の支流にて長六川と云します
る。大膳先生は一日閑を得まして櫻園に参りました。去來と云ふ人の發
句よ

五十八

なにとぞと花見る人の長がたな

と云ふ句がありますが今に之は分らぬと云ふ人がございます。扱此風
流の花觀と云ふものは別段なもので全く花を見るならば人の居ない
所で唯だ一人四邊の閑靜さ所で見ると全くの花見です。然るに爾う云
ふ連中は少なくて大抵は花より童子の方で若い連中が花見に参りま

藏武本宮

すると甲何うだい今日は前花見に往たさうだが見て来たか乙
何うも大層人が出たせ花の下で酒を呑むが楽しみだ又美しい女達が
鬼子ッこうをしたり隠坊をしたり大勢寄て騒いで居たが中に、倒つ
た奴があつて緋縮緬の腰巻を出して轉げたのは誠に面白かつた。甲
そりやア宜いが花を見て来たのか乙否や花は見ずに歸つて来た。杯
と云ふ無風流が多うございます。野田大膳と云ふ先生は武術者に似合
はず優美い事を樂しみました。尤も之が侍士の常でございます。で大膳
先生は破子辨當瓠に酒を入れて奴僕に持たせ此風景を眺めて此方ら
の方へ参ります。と早や夕景に参ります。

歸るさをかにと夕日の糸櫻いと色添ふ花の木の下

と云ふ古歌がございます。花見の人々はモウ夕景の入相櫻を別れとし
て東西に散り南北に別れて已が隨意に立戻りました。此時大膳は瓠の
酒を呑尽して之を小者に持たせ一子豊丸と云して當年三歳に参りま

五十九

する悴を連れて 大「サアモウ戻らう戻らうと守の婦に豊丸の手を引かして諸共に此處を立去り廻て向ふの山邊に近づきますと此處にも木の間木の間に櫻咲き満ち岩間々々に踏躑が咲て得る言はれぬ風景でございますから思はず立止まつて眺めて居りますると此御子息の豊丸と云ふのはマダ漸く歩く位な年齢でございますすが十カゝ悪戯で如何致したのでございませうか此守婦が油断をして居りました内に岩間の踏躑を折取らんと云ふ氣かチヨロ／＼と馳出しますると苦蒸して居りまする大きな石の上へ上る途端に前の川へ這り落ちました守の女は「アレ旦那様大變でございまする……アレ若様が……大「オ、早う往かんかど大膽が走りまする内に急流でございまするか早や豊丸は小半町も彼方へ流れて参りました故に下僕の周助は慥たしく川へ飛込み守の女は聲を上げて泣騒ぎ 女「自分がお守を致して居りました若様が川へ落ちたとあつては自分も共此川で死か

しければ旦那様へ相濟みませんと泣て居る大膽は川上にあつて 大「誰か来よ誰か来よと言ふて居ります尤も出羽の川は總て急流でございますから之を見た人々も「ソラ野田の若様が川へ落ちた己れが飛込まう我が飛込めと騒ぐばかりで一人も飛込む者はあゝ其内に一町半程流されました處へ先刻から向ふの堤際で野田大膽先生の花見の様子其お侍士の風姿を眺めて頷りと羨んで居りました一人の小僧が突然川へ飛込みまして援手を切て遊ぎます故彼れは何處の小僧だらうと云ふ内忽ち二町ばかり遊ぎまして豊丸殿を左へ抱き堤へ上つて小「サア皆さん之は彼のお侍士の若殿様だ俺がお助けやしたに依て早うお侍士にお知らせ下さい水は澤山呑で居ない却て流れが激しいから水を呑む間もさく流れたからお身体は何ともあゝと言つて居る所へ野田大膽殿續いて家来も驅来り 大「如何にも其方は感心な者だ我が悴を助け呉れ辱けあゝテ姓名は何とやす尋ねられて小僧は「ハ

「私は……」と是から姓名を名乗る是れ何人でございませうか看客諸君も大抵浮想像にありませう之も佐々木久三郎後に至て佐々木岸柳と云ふ豪傑になりませう佐々木の傳記が今一回ございませうから暫時休憩を致して次回に上げませう

第六回

此時彼の小僧は「之は先生様で在らつしやいまするか私は御城下を離れまする在に住で居りまする久三郎と申す者でございませう。大ハ、ア、テお前の両親等はあるのか。久、イエモウ私は今は孤子で父母もなく唯だ一人村の人の世話を受けまして或時は山へ這入り獵師の真似も爲し又或時は樵採を致して其日を送つて居りまする者。大、ア左様か、それは不便の事である併し今此急流へ飛込で我子を助け呉れた水練の程は感心致した何人より學ばれたるか。久、イエ之は別にお師匠様とてはございませう山々の谷へ身を投じて遊びの福古を致し

宮本武蔵

宮本武蔵

て居ります。大、併し堤の上より川へ飛込む時にエイと云ふ掛聲をして飛込だが總て掛聲と云ふものは身に答へた所がなければ定まらぬもの、お前は幾分か劍法を學びしかど云ふのは流石野田先生此小僧の舉動應接萬端何處となく武張つて居る所に眼を着けたそれも其管佐々木承禎の遺子ですから……大層大膽の氣に入りまして。大、兎も角も私の屋敷迄俱々参るやうにと云ふので同氣相求め同病相憐れひと云ふ喩の通り久三郎の方にも今人々から聞けば彼れは常御殿主様の劍術の先生だ野田大膳様だ、エライ者だど云ふ話してございませうから久三郎も豫々劍道を學びたいと云ふ氣がありまするに依て久有難う存じまする、然らば私は家とても無く彼方らの家の物置を借りて寝伏しを致し此方らの人の様を借りて寝たり致して居りまする者故にお供を致したう存じます直ぐ大膳殿は久三郎を連れてお歸りになりませうと奥方も此話しを聞いて大層喜び守の一婦は奥様へ對して

お詫を致しますと 奥ア一〇 仕方が悪い丁度今が危険な年頃手も
離されぬのが子供の常何もお前が悪いのではない併し其百雑の子ど
やらが助けて呉れたのが豊丸の幸ひ其者を之へ〇 家来の案内にて
久三郎は野田御夫婦の前に両手を支て挨拶を申し上げますと大層
奥様のお氣に入つて 奥それでは當分宅へお置きになつてはと良人
大膳殿へ御相談にありましたから其明る日に大膳殿は村の甚兵衛と
云ふ者を呼出して 大當分私が宅へ置くから左様心得て居よどのお
言葉甚兵衛も大に喜んで 甚それは誠に有難い仕合せでございます
此久三郎は可哀さうに遠い國で産れまして故郷へ戻つて来る間も赤
く祖母は病死致し一二年経つ内に又母親の松ヶ枝に死別されました夫
故私は親類ではございせんが餘りの惘然さに世話を致して居りま
した故此子はナニカ様子を聞くとお武家の落胤だとか云ふ事何うぞ
大膳様此奴を一人前の人にしてやつて下さるやう若し又此久三郎に

心得違ひがありましたら此甚兵衛が引受けを致しますから何うぞ
何分お願いいたしまする金受けになる人も人受けになるなど世の人の
云ふのに甚兵衛が進んで受人にありましたから大膳も安心を致し愈
々久三郎を自分の家へ置く事になりました併し中間にして使ふは
惘然とあつて羽織袴を着けさせ大小を手挟み若黨にして使つて居り
ますそれから久三郎に劍術の稽古をさせるにて道場へ出して大膳殿
は御門人井上龜五郎と云ふ者にお申し付けにあると委細承知仕り
龜サア打込で来いと云ふ久三郎始めて竹刀を執りました故に何とあ
く調子が可笑しい中には笑ふ人もありますから大膳殿「決して笑
ふな、マダ其道を辨まへまいに依つて体の構へ方も可笑しいがドウして
尾の踏方アノ氣合の様子は初心としては旨いものだと思ひになる、
尤も大昔しは劍術の稽古に面籠手胴を着けてボカリ〇 〇 〇 〇 のでは
ございせん既に直眞影杯は最初木劍を持って形を仕ふ乃で打つ手聞

藏 武 本 宮

く手受太刀等の形を充分學んで終ひに向ふを打つやうにあつて頭草
とす厚い皮を額に當て、鉢巻を致し、中には木劍の立合と云ふ
と素面素籠手で向ふを打つた杯と云ふ者があり、すが決して爾う云
ふ事はありませぬ木刀で打てば竹でも砕けます木劍は唯だ形を仕
ふだけで向ふを打ちますのは袋竹刀でございます、袋竹刀とすすと
革の丸き袋の中へ竹の細く切たのを何本もなく入れてあり、すから
敲かれると少しは痛みますが決して怪我杯をするものでない、それ
が段々ど當り前の竹刀を持ち、面籠手腕を着けて敲き合ふやうになつ
たのです、併し是等を長く演じますると、退屈ですから、歸します、そこ
で龜五郎殿が久三郎と立合つて其日一日教へてやり、夫より毎日、
教へてやう處が感心なのは小僧さん夜分にあつて皆門人の寝た時
分に一人道場へ參つて太き赤檜の木刀を振て居ります、或る晩の事
野田大膳様がお居室にて茶にうかされしか寝に就かすウツラ〜し

藏 武 本 宮

て居ると道場で「ヤー、ヤー、エーッ……」と云ふ掛聲がしますから、今頃
何であらう誰が稽古をして居るであらうとソツと來つて見ると久三
郎が両肌を脱いで木刀を右左へ振て居る感心なものだ、外の弟子達は
稽古を終ふのを待て居て直ぐに城下へ遊びに往き、女でも、酒
でも呑む、閑さへあれば遊びたがる、それを引換へて久三郎は日の登り
て居る時は始終劍道の事のみ、心に心を入れて居る、實に感心したから、其
れへ出て褒めやうと思つたが、イヤ、師匠の目を怒んでまで稽古をして
居るものを褒めては却て爲にあらぬと思ひ返して、其儘にお寝にな
りました、斯くする事久三郎は三箇年、併し餘り物に凝りますと段々
身体が疲れる事故、或日大膳殿が側へ呼んで、大久三郎やお前は、
内に劍道は大層上達を致したが併し慢心をしてはならんぞよ、又修行
は宜しいが少しお前は無理をやるやうだ、人間も修行をする時は修行
の時又身体を養ふこともなければならんから、夜深に至るまで道場に

藏 武 本 宮

居て餘り身体を使つてはありませんぞ。久有難う存じ升、それではお
師匠様私が毎晩皆さんのお寝みにあつて居る時道場へ出て木刀を振
て居るのを先生は御覽になりましたか、恐れ入りました。大「イヤ、謝罪
る事はさ、い感心致して私も喜んで居るが併し身体は大事にするが
宜い師匠の言葉に久三郎も涙を流して喜びました、其内段々歳を重ね
まして十五歳より二十一歳迄七年修行を致しました殊に野田先生も
外の弟子とは違つて此久三郎には最も念を入れて教へました、唯だ道
場を出て木刀竹刀を持つて敲ぎ合ふばかりが稽古ではなく、チャンと
坐つて居る時よも一々物を尋ね答へが悪いと小言を言ひ答へが善け
れば之を褒める所謂口傳でございます、總て物は見たり聞たりするの
は極く樂でございます、夫故七箇年ではありまするが他へ参つて十箇
年も十五箇年も修行したよりか尙更確かお腕前にあつて今では野田
先生の門人の内にて久三郎に及ぶ者は一人もなく師匠の代稽古が務

藏 武 本 宮

まるやうにありましたから家中一般の人も賞讃して、甲「彼の若衆の
久三郎殿は終ひに野田先生の養子になるか知らん、乙「イヤ、それでも
豊丸殿が在らしつた限りは養子とはされまい、丙「それでも先づ彼の
人より外に野田先生の後目はあるまいと家中の人にも可愛がられて
居りましたる内に人間は老少不定病の器で如何なる察察も仕方のお
いものど見へて此野田先生が重き病とありまして早や半年餘り道場
へ出て教へる事が出来ないうれが爲に最上公を始め御重役も大層御
心配をなさされ御大願の太守ですからお醫者も澤山居りまして種々の
手當てを致しましたが其甲斐もあくトウ、大膳殿病死致されまし
た之に依つて兎に角家督相續は悴の豊丸殿と極りましたが若年の事故
ナカ、父の後を引受て一同へ指南をすると云ふ譯に参りません、夫
故に此久三郎が先づ一時豊丸殿の後見となつて門人共へも教へて居
りました、茲に於て久三郎へは最上公から別に祿を賜はると云ふ仰せ

藏 武 本 宮

が あり ました が 此 人 は 至 て 變 人 で 私 は 元 野 田 大 膳 の 家 の 若 黨 に 住 込
み ました 者 故 何 處 迄 も 野 田 家 に 仕 へ て 最 上 公 へ は 仕 へ ませ ん 師 匠 が
病 死 さ され た 後 は 未 熟 な が ら 此 久 三 郎 が 御 門 人 達 へ 劍 道 の 指 南 を 致
し て は 居 り ます も の 豊 丸 殿 が 後 目 相 續 を な され た に 依 て 其 豊 丸 殿
に 仕 へ 彼 の 人 の 後 見 は 相 勤 め ます が 最 上 公 よ り の 祿 は 頂 戴 致 し ま
せ ん と 斷 つ た と 云 ふ の は 何 だ と 云 ふ と 久 三 郎 の 益 簡 で は 昔 か ら 劍 道
者 も 夥 多 有 る が 我 も 是 よ り 益 々 修 行 の 上 何 か 一 つ 他 に 優 つ た る 術 を
編 出 さ ん と 夫 れ の み 考 へ て 居 る 然 れ ば に や 後 に 岸 柳 と 云 ふ 名 を 得 た
即 ち 柳 の 枝 を 相 手 に 致 し て 一 流 の 奥 義 を 極 め た 人 之 は 後 の お 話 し で
さ ざ い ます 光 陰 關 守 あ く し て 矢 の 如 く 早 や 幾 歳 か 過 ぎ ます 内 に 以 前
に 變 つ て 此 久 三 郎 少 し く 慢 心 の 兆 が 出 て 今 迄 は 若 黨 で 居 て 家 中 の 人
々 に も 鄭 重 に 挨拶 を し た の を 自 然 と 師 匠 風 を 吹 か し て 遂 に は 言葉 も
難 に 成 り 初 め の 内 は 仕 方 が あ い 縱 令 若 黨 で あ ら う と も 腕 前 が 確 か で

藏 武 本 宮

師 匠 の 後 を 引 受 け た か ら 取 も 直 さ ず 大 膳 様 と 思 っ て 居 た が 餘 り 小 言
が 激 し い 故 に 段 々 と 家 中 の 者 が 悪 口 を 致 し て 甲 時 に 竹 村 さ ん 殿 に
障 る と や ア な い か 乙 何 を …… 甲 彼 の 久 三 郎 さ 乙 爾 う さ 實 は お
手 前 が 言 は せ け れ ば 拙 者 か ら 爾 う 云 は う と 思 っ た 初 め の 内 は 大 膳 温
和 し く し て 居 た が 此 節 は イ ヤ に 威 張 つ て 來 た モ ッ 俺 は 稀 古 に 往 か な
い 幾 ら 劍 術 の 腕 前 が あ ら う と も 高 の 知 れ た る 後 叔 は 土 民 動 も そ る と
己 れ は 土 民 で は ない 近 江 國 に 有 名 處 の 一 城 を 築 い た 者 の 偉 だ 杯 と 言
つ て 居 る 俺 は モ ッ 罷 め や う 甲 俺 も 罷 め や う と 一 日 一 日 に 門 人 が 段
々 と 減 つ て 仕 舞 ひ ました 然 る に 野 田 豊 丸 と 云 ふ 人 は 至 て 温 和 し い 内 氣
さ 方 で す か ら 時 に 依 て は 久 三 郎 に 向 つ て 意 見 を し て 豊 叔 お 前 は 俺
の 家 來 と 云 ふ や う さ も の 俺 が 三 歳 の 折 川 へ 落 ち て 命 を 繋 ぐ 處 を 助
け 呉 れ た 大 恩 人 じ き 父 の お 言葉 に 依 て 俺 は お 前 を 兄 さ ん と 思 っ て 居
る が 今 日 も 今 日 と て 登 城 を す れ ば 家 中 の 面 々 が お 前 の 噂 さ 成 程 父 上

宮本武藏

様の後を引受けて呉れて是だけになつたは辱けないが少しお前が慢
 心をしたやうだに依て何うか其心を罷めて貰ひたいと意見をします
 と諫言は耳に逆ふ良薬は口に苦しの喻へで自然と之を鼻で扱らうや
 うにあつて來ましたから豊丸殿并に大膳殿の未亡人も自然と久三郎
 へ對して言葉も交さぬやうになつて來ました利口な男でございます
 から早くも之を知てエース様お所に居て生涯終るよりか一層の事は
 から諸國を廻り剣道修行を致して一の流儀を廣めやうと決心致しま
 して久三郎は二十五歳の折出羽國山形を後と致して劍道修行のため
 國々を廻りまする、坂道中のお話しは別段なく泊りを重ね日を重ねま
 して参りましたのは尾張國茲に日本武尊のお持ちにありました彼の
 名高き草薙の御劍の納まつて居ります熱田の宮へ参詣を致し圖ら
 ずも此處で劍道の妙手の一つ纏出し是から久三郎が岸柳と改名の條
 りより圖らずも宮本武藏の曾父吉岡無二齋に温泉場にて出合ひ初

めは親しく致しましたが事の間違ひからして無二齋を一刀に切て落
 すと云ふ宮本武藏の敵討にある講談佐々木久三郎岸柳成長の傳記は
 是迄に止め置き後に戻つて宮本武藏のお話しに移ります之は次回
 に詳しく演じませう

第七回

宮本武藏

茲に佐々木久三郎は尾張國熱田にて一流を編出しました其譯はマダ
 修行中でございまして或時海岸に出で、蒲潮干潮の波音を考へ又或
 時は松風の耳に遮る音を聞き又或時は柳の枝が顔にあたるを拂ひ
 退ける是等の所は武術修行のお話しでナカク、充分武術を學ばんけ
 れば口演者に於ても相分かる譯のもんではありませぬ能く講釋師は
 已れの勝手な事を言ふて居りますが武術の極意と云ふものは容易な
 らぬものソコで岩石碎き燕返しと云ふ手は此久三郎が考へましたか
 之は固きものを敲いて柔らかく受けると云ふ又燕と云ふ鳥は横に飛

蔵武本宮

ふ事は實に速く矢も及ばんと云ふ位此燕の風を横ぎる氣合と云ふのは實に人間杯が之を真似て出来るものでは無い尤も人間には翼がございませんがそれを岸柳が木刀にて岩を敲きそれを返して左へ受ける其早業と云ふものはナカク容易ならん事です己れは身体を後へ引いて前へ木刀をやると云ふ三拍子の氣合去れば後に武藏が仇討の時に此岸柳の燕返しのを爲に拂はれまして既に兩足を切落される處を武藏は劍道ばかりではございません若し劍道ばかりならば爰で岸柳の爲に返撃になりまするが俗に天狗飛さりと申しませず飛上がる術を覺へて居りましたが爲に岸柳に拂はれたる時ニイと云つて上へ飛ぶ此折岸柳の刀が武藏の草鞋の泥を拂たと云ふ位モウ一寸武藏の飛上りやうが低ければ岸柳の爲に足首を切拂はれるのでございませぬ、是等は何方らも名人同士の立合末に詳しく申し上げませぬッコで久三郎は自然と岸の柳に由て術を考へましたから吾は岸の柳だと云ふの

蔵武本宮

で終ひには自ら岸柳と名乗りました元と野田大膳殿に就て充分武術を學んだ上に又自分が一の術を編出しましたから先づ只今天下に敵たう者は無いと云ふ位の敏腕にあり是より京へ上りましたが大府武術が盛んでございませぬから久三郎の参つた事が忽ちに知れ渡りまして劍道修行人佐々木久三郎岸柳と云ふ者が來たどて都に在る處の諸侯方が何れも岸柳を召されて其業を心算になると實に天晴の敏腕然るに岸柳は前にも申し上げました通り慢心がありませぬから御大身方へ向つても高慢な言葉がありません故業は宜しいが彼の人物は甚だ宜しくないと云つて一旦お呼上げに相あつてもお召進へにはならんで先づ相當な謝禮を致して所請敬して遠けられませぬから主取りを仕損なつて残念で堪らないから人の事を悪く言つて世の中は皆千人目明き千人と云ふが扱目明きは無い者だ此岸柳は自ら一の妙術を考へ昔しより今に至る迄武術に掛けては我が日本國に吾れに敵く

藏 武 本 宮

者はさく又時來らば一國一城の主人にも成れる人物であるのに有は
かりだから仕方がない杯と今は宛然發狂人の如く誰に向つても始終
斯の如き高言を吐て居ります或時岸柳は播州近路の城下へ参りま
て近江屋佐五右衛門と云ふ旅宿へ泊りました一日二日と過す内に其
旅宿の亭主と心安くあつた處から此佐五右衛門が言ふには 佐時
先生如何です當御城下へ道場をお出しなすつては御城主様からお咎
めにさる氣遣もありませぬ當時は城下町人共も皆御術を大尉好みま
そる失禮ながらお時へがございませぬければ私が引受けませうと岸
柳の高慢な言葉にも構はず此佐五右衛門親切に大尉世話を致して道
場を開きました初めの内は好い鹽梅に弟子も出来ましたが終ひには
師匠の言葉が餘り荒々しいから何ぼ弟子とは言ひながら宛然大猫の
如くに扱はれては面白くない稽古はしたいがア云ふ先生に教はる
と腹が立つと云つて又弟子が減ちてしまふ折角開いた道場も弟子が

藏 武 本 宮

無くては仕方があくツヒ〜彼方へ街儘ひ此方へ街儘ふて
リと播州有馬の温泉へ参りました其當時は有馬温泉場には諸家の御
家來達が皆湯治に來ておいでなすつて間々には運動のため温泉場の
庭に於て劍道の立合杯があるうれを聞て岸柳が善し斯ういふ所には
大名の家老杯も來て居らうから此處で一つ自分の後胸を見せて抱へ
られやうと云ふ量箇で佐野屋と云ふ家泊りせした處が岸柳如きに
は誰も目を懸けあいと云ふのは宮本武藏の伊賀父吉岡無二齋殿は段
々老年にもなり身の補あいの爲に湯治場へ往て樂しまうと云ふので
有馬へ來てお在なさる尤も此折無二齋殿は當時中國十一州の大守越
州廣島の城守毛利右馬頭輝元公に召抱へられ知行八百石を頂戴して
何不自由さ身でございまするが早や六十歳の上を越へ老体とある
に従ひ動もするど昔しの古疵か痛み或は打身杯の痛みが度々出でま
す夫故有馬の温泉へ養生の爲においでにかりました自分の家來

又は門人を伴に連れて往くと養生にあらんと云ふものは無二齋殿は心懸の善い人ですから常に我子や自分の家來と雖も親主人の權を以て働らかせる事がお嫌いで大抵は自分でなさる殊に温泉杯は遊び半分よおいでなさる事故家來を連れて往て使ふのも氣の毒に思ひ且つ湯治場では武張つた話しをするよりも何か面白き樂しみをして世の中を樂に送りたいといふ思召しで毎度出入りを致します處の八百屋の久助といふ者がお城下にあります此者は至て篤實で甚も可なり打ち風流の事も少しは辨へて面白い氣性ですから一層の事此者を連れて往かうと思ひまして早速呼寄せ。無頼久助今度湯治に往くが伴を致して呉れまいか。久有難うございますお伴を致しませう直ぐに話しが極まりしたから久助の家には手當を致して此者を若党の如くにしてお伴に連れて有馬へ來つて第一番の宿屋にお在なさると申し上げた通り諸國の武家方が大層入込で居ります故謹言ふことな

く吉岡先生が當旅宿にお在さると云ふ事が知れて我も〜と尋ね参り 甲「何うか御養生中ではありませうが御す暇の折は手前にも劍道の一手お話しを願ひたい。乙「私にも劍道のお話しを願ひたいと願ひに頼まれたましたが。無イヤ〜此度は我等は唯だホンの心慰めの爲に参つた夫故劍道の事は御免を蒙ると斷つては居りましたやうなもの、遂には人に誘はれ元々劍道者ですから之も身体の運動にからうと旅宿の庭に於て尋ね來る人々に劍道を教へたりして居りますから岸柳杯に目を懸ける者は幸い此事を聞て佐々木岸柳が或日右の宿へ尋ね参り。岸當旅宿に吉岡無二齋と云ふ老人が泊つて居るか。〇左様でございます。岸手前は佐々木久三郎岸柳と申す者老人へ御對面を願ひたい。甲「我等は岸柳門人青山紋平。乙「押田佐吉と申す岸柳取立ての門人でござる無二齋老人に面會を致したい其言葉杯の様子が誠以て無禮でございます宿屋の若い者直に無二齋先生に之を知

藏 武 本 宮

らせる。無ハ、アそれは豫て聞及んで居る佐々木岸柳とか云ふ當時
赤にか國々を廻り道場を尋ね少しく劍道の下手の者と見ると之を酷
い目に遭す所謂道場荒し面白き者來つたり。雖て久助に少し附けま
ると八百屋の久助それへ出て。久「エー此方らへお通り下さいませ私
は吉岡無二齋の若黨久助と申します者。岸「ア左様か許さつしや
い。是より坐敷へ通り無二齋は事師に挨拶を致しましたが岸柳の方
では傲慢な口調を以て。岸「エー御老人は當時入道に來てお在な
然るに喜んでござるか日々運動の爲とか或は又思みの爲とか云ふて
人々へ劍道を教へてお在なると云ふが之は全く思みに教へるので
ござるか又は金銀を取て劍術を商はれるのでござるか。私は日本國內
を廻り劍道者の道場を尋ねると言へば金銀を以て劍道を教へ杯する
事は更に嫌ひ所謂天無祿の民を生せずと云ふ事がござる。依て今日棚
口の爲に劍術を商ふのでは無い日本に名を得んとする。而して無二齋

藏 武 本 宮

殿も御承知でござらうが吾れ岸柳と名を附けしは茲に奇々妙々一極
廻りし妙手を編出した爲でござる。成べくは御老人お立合を願いたい
其言葉の様子何となく氣違然て居るから無二齋は岸柳の言葉を少し
も氣に懸けません。無「イヤ之はく、マダくお手前はお若い豫て
聞及ぶに岸柳殿は劍道の達人、モウ無二齋杯は老体にあつて身体も
自由にならず夫が爲に斯の通り温泉場へ來て氣を養ふて居る位な事。
ナカ「貴殿と劍道のお立合杯は出來ない。岸「イヤお黙りなさい。縱
令人から好まれたにもせよ思みにもせよ此庭に於て劍道を教へま
る以上は拙者に限つてお立合が出來ないと云ふ道理はあるまい是非
お立合を願ひたい。爾う斯うする内に近くの宿屋に居ります多くの
武家方が之を聞いて追々此宿屋へ集まり参りまして。甲「ソレ評判に
聞た佐々木岸柳と云ふ奴が無二齋先生の所へ來て立合を所望を致し
て居るとやら面白し。乙「ナニ佐々木岸柳彼奴もナカ「評判の

藏武本宮

達人と云ふ事併し吉岡先生に及ぶものか、杯と口々に騒ぎ立ちて忽ち此宿屋の庭へ集まつた人々は百人餘り再三數度無二齋は辞退をしたが聞入れませんでした。無宜しい併し岸柳殿真と立合をしたいと云ふさらば一度我等は廣島へ立歸り其上にて上願ひ済の上にての試合は仕つるが此場にて粗忽にも旅宿に在て私の試合をするは宜しくはい。岸アイヤ、爾う仰せらるゝは無二齋殿折角岸柳が尋ね参りしに一時此處を逃げられるお心でござらう。無イヤ之は無禮もお言葉、逃るやうな未熟ある吉岡無二齋ではある一言二言云ふ内に互に言葉も荒くもつて憎くも岸柳の振舞と心得たれば、無然らばお相手やうと雖も宿屋の廣庭へ出ましたから見物一同は片唾を吞で控へて居る此折佐々木岸柳は長き木刀太さる人の常に持ちまするよりか三倍も太き木刀を執上げましてサア來いと云ふ身の構へ、無二齋殿は短かき木刀之は秘藏の木刀で温泉に參るにも袋に入れて持來り今

藏武本宮

迄は之を取出しませんが岸柳の一言憎しと之を取出しました、大勢の者は皆老体如何であらうかと拜見をして居ると斯は如何にヤツと云つて立上つた時今迄は少しく腰は棒の弓の如くに曲つて居たが木刀を執つて立上る時は真直に腰が伸びました併しながら無二齋殿は老人の事故白髪は宛然雪の積りし如く殊に小兵でございます之に引換へて岸柳は大兵に致して壯年血氣双方睨み合つた時には夥多の人々は「ア御老人お可愛さうである此方らは体も大きいし血氣壯ん御老人では逆も六ヶしからうと一同は手に汗を握つて心配をして居る内に「エイヤツと打込だる佐々木岸柳の木刀を無二齋は左の方へヒラリと避けましたから虚空を打た久三郎南無三殘念なりと右へ拂へば又ヒラリ老人とはヤシながら吉岡無二齋此時は全然少年の身の如く其身軽く致してヒラリと飛廻り岸柳が打込で來る木刀を受けずに唯だ体のみを交して居る如何に岩石碎の術を試み又は燕返しの早業を

藏 武 本 宮

仕ふ岸柳も無二齋の早業には實に驚いて之ではならんと外へ拂つた、
アワヤ無二齋は小手の通りを打たれたらうと思ひきやエイと云ふ氣
合で手許へ付け入り、急遽岸柳が肩の邊りを發矢と打つ、何かは堪らん
佐々木岸柳ヒヨロ〜と後へ下がるを附入つて利腕を打と打ちまし
たから流石の岸柳木刀ガラリと取落すを無二齋は突然木劍を岸柳の
頭上へ當て、グツと押す、老爺爺と思つて居りました處が其力は實に
強くサシモの岸柳も其處へ尻餅をついて仕舞ひました、無二齋は小聲
にて無お若い〜岸柳殿、失禮ながら世間にて、傍身の爲に打たれる
者あるか知らんが夫れはマダ劍道も辨へぬ者、老人吉岡無二齋は力は
ない、先刻傍身の言はれた通りモウ垂碌した、人間の肩れじやがマダ、
傍身如きお年若の者に打込まれる無二齋ではござらんぞ、誠には上
から上のあるものは是からは決して天狗心にあられるな、高言をきされ
るお恐れ入りましたか、と彼を怒らしても見たり又柔かに彼へ教訓を

藏 武 本 宮

加へる無二齋此折見物一同はザマを見るワツワツと云ふ、岸柳面目次
第もない、側に居たる青山押田の二人も呆れ返つて仕舞ひました、岸柳
はソコ〜にして此場を逃げやうとするから無二齋は「アイヤ佐々
木殿折角お尋ね下されたのに此儘お歸しやすは不本意何はあくども
粗酒一〜……コレ久助々々支度をせよ……折見物の方々よ佐々木岸
柳殿は確かなお腕前、先づ劍道の傍名人とや、老人吉岡無二齋をお殿り
あされて故意とお負けなされた、無二齋の勝は眞の勝ではござらんと
云ふのは後難を虞れるが爲でございます、見物は此言葉を開いて「ア
〜流石は吉岡無二齋はエライ、向ふに花を持たした感心あるのだ、と一
人減り二人減り皆此處を去て仕舞ひました、其折岸柳は「誠に以て吉
岡殿面目次第もござらん、吾れ傍身の如き傍達人に出會ふた事なく是
迄高言を放つて居りましたが實に傍身へ對しても無禮な言葉お詫の
仕やうもござらん何うぞお許し下され、此後何處へ参らうとも決して

高慢をやさん恐れ入た身身の腕前どナカ〜奸智に長けた男ですか
ら吉岡に詫びます、無二齋も氣の毒に心得て 無イヤ〜其やうに
詫られる事はないお手前はナカ〜未熟でよいお若いにしては感心
だ。ど何も花を持たして話す内に酒の支度も調つたどの事はより一試
酌まうと云ふ時に岸柳は「お志しは誠な厚けなうござるが是より四
五里先きよ少々訪問る者もござるから折角の御馳走ですが今日は之
にて涉免を蒙ります、挨拶ソ〜二人の弟子を連れて此處を立出で
ました、後にて吉岡無二齋は莞爾笑つて、無久助、扱々後の岸柳と云ふ
奴は無禮な奴であるのう。久且那樣好い氣味でございましたか、私
はマアおれで胸が空きました彼の野郎、日本國中を廻つて負けた事は
一遍もない、杯と大層高慢な事を言て居りましたが先生の爲に打たれ
ました。無併し之はさんだぞ、決して何處へ參つても主人無二齋が佐
々木岸柳を温泉場にて負した杯と話しを致すな。久、ヤしは致しま

第八回

せん話しを致して居る處へ我が宅より致して早く立戻るやうどの書
面何事の出来せしかど吉岡無二齋訝かりながら遂に有馬の温泉場を
發足て我が家へ立歸り、是より吉岡無二齋が岸柳の爲に横死を遂げる
と云ふお話し次回にやし上げます

扱吉岡無二齋は有馬の温泉にて佐々木岸柳を懲らし夫より致して彼
の八百屋久助と二人にて物語りの處へ國許より伴清三郎用事ありと
て使の人が参りましたから吾れ斯の如く湯治場に在て身を養はんと
云ふ處へ用事ありとのみの書面にては更に分らず何か病氣の事にて
もありつるかど心配を致して支度匆々に立歸りますと案の通り伴清
三郎病の床に臥して居ります故大に心配を致して醫者よ薬と夫々手
當を致しましたる處一日〜と快方に越きました、無二齋も大に安心
を致して居りますと太守輝元公無二齋をお側へ召されまして、輝如

何に其方は旅中にあつて彼の佐々木岸柳を懲らしめた由を近臣
東馬より承つたが之は眞の事であるか。無沙意にございませぬ私事
を好みませぬが先方より致して無禮なる一言に己を得ず立合ひまし
た彼もナカク、劍道の達人にしてマダ年も若し惜しき者でございま
するに依て充分教訓を加へました。太守お聞き遊ばして、願うれば如
何にも老人の忍耐感心を致した彼の岸柳は増田右衛門尉を始めとし
て其他の大名達も家來に抱へんとし此毛利へも勸めた者もあるが彼
れ劍道は充分の腕前のやうに見受けられど何となく慢心面に表はれ
居る故何れへ參つても其心を憎んで抱へる者無しと聞く、諸大名
にて抱へんとする位な腕前の岸柳を、身名人とは言ひながら老体と
して彼を打懲らしたるは予の家に対しては實に名譽の事である、依
尚は加増をやし付けるとあつて有難くも百石のは加増に相ありまし
た、毛利公は先づ當時日本に於ては、家來無二齋程の者はあるまいと

お喜びなされて居る、然るに無二齋の門人に多田權左衛門と云ふ人が
あります、此人は至て無二齋先生のお氣に入でございませぬが此度師匠
の悴清三郎殿、病氣、快氣に就て病中の憂ひを慰めんと考へ猿樂の
能を催す事に相なり、依て其前日無二齋の所へ來つて、權明日は何う
ぞ、光來を願ひたい、又、子息清三郎殿、病氣も、快氣に相なり、誠
以て結構な事、でござる、就ては何うか、清三郎殿も、駕籠にて、参
はらば、辱けあうとござる、之は師匠へ對しての禮でございませぬから、權
左衛門親しくやし入れますと、無二齋は、大きに喜び、無左様か、然ら
ば、明日何時頃より出張致して宜からうか、權、されば、家中の面々、何
れも、當番、役目も、ござらうに、依て、夕四時を、一番の舞と致して、夜
八時迄に、舞納め、する事故に、何うぞ、其刻限に、出張を、願ひませぬと、云
ふて、權左衛門は、歸りました、探明る日に、相なり、悴清三郎に向つて、舞
どうしや、其方も、今日は、駕籠にて、参つては、何うか、權左衛門も、心配致す

藏武本宮

事故お前も参らんか。清お父上有難うございます折角の親切を無に致すやうでござるが、私には息切れが致しまして駕籠に乗て参れば足は疲らさずとも宜しいが何となく今日は爾う云ふ所へ参る心持がございませぬ何うぞお父上私の事は心配下されませぬな此様子ではモウ三四日経てば病氣も全快致しまする何うぞお父上は誰か連れておいで遊ばせませ私はお留守居をして居ります。無さうか、られる宜からう、却て病氣の時に無理に連れて往て人々氣をかね杯する時は病に障るから夫れも宜からう、併し折角權左衛門が心配致し呉れる事故乃公が往て程宜うやさう、うれでは悴往て来るぞとお出遊ばされたのは四時少々過ぎ、扱多田權左衛門の屋敷へ來つて見ると何れも家中の面々詰掛けて居りますし、先生がお入來、吉岡殿無二齋殿と皆一同に尊敬致します、無二齋も一同に挨拶を爲し又權左衛門に向つて、無多田氏今日は悴清三郎も扱きに預つたが彼れ大分心地能くアノ分に

藏武本宮

ては兩三日内に床上げも出来やうが親子諸共貴宅へ参つて種々世話にあるも却てお氣の毒殊に病中ではあるし彼は折角の事ではあるが今日は見合せました悴より厚く禮を……權コレハ、何うも、先生恐れ入りましたそれじやア強てお招きやすよりも却てそれが氣樂……無左様手前が立戻つて今日拜見を致したる猿樂の様を完分悴に話したら夫れも亦一興にありませう爾う斯う致して居る内刻限になつて權左衛門の宅へ舞臺を構へまして猿樂が始まり心地能げに無二齋殿は之を眺めてお居であさる門人達も今日の舞を喜んで見て居る内に早や夜も八時となつて猿樂も相済み後とは皆門人達が集つて居る事故無二齋殿も何時になく氣機能く武術の話し杯をさされ常には深く酒はお飲みませぬが權左衛門の舞臺にツヒ、銘前さされ其内に若侍士達は己が隨意立歸つて仕舞ひました後に殘つた吉岡先生「扱權左衛門殿今日は終日能を見物致し其上鄭重の

藏武本宮

萬幸奴 岸 黙れ、汝の爲に佐々木久三郎は何れにか仕官になるべき身を有馬温泉場に於て不覺を取り夫が爲に誰言ふとなく日本中の評判となり今では主取りも叶はんは汝のお蔭サア老老木刀を持って立合ふ時は兎に角眞剣立合あらず不覺は取らぬと云ふ内に後より足音もせず伺ひ寄つた一人是ぞ岸柳の門人誰でありまするかは面を包んで居りますから分りませんが卑劣千萬にも二間餘の鎗を以て吉岡無二齋を壁をも掛けつ突通しました無二齋は鎗を以て横腹を通されアツと叫んで踏跟く處を岸柳の爲に眉間の邊りを切られました此位の名人が誠に不覺のやうでありまするが其時は大醉をして居りましたが爲に身依自由になりません併し手傷を負ひながらも暫時は体を交して受けましたけれども何を云ふにも鎗にて横腹を突かれました故其苦しさ言はん方なく後へにドウと倒れました處を佐々木岸柳は吉岡無二齋を滅多切り、岸、サアモウ是で宜い門人共は鎗を其儘棄置して早う此

藏武本宮

場を去て仕舞へ手前も是より……併し兎も角も止めを差さうとのし掛らんと致しました時に向ふの方よりトットトツと足音かする、南無三見谷められてはあらんと其儘に岸柳も門人も何處ともなく迷て仕舞ひました處へ参つた一人の男是なん彼の八百屋の久助是は今晚吉岡様のお宅へ少々先生にお願いがあるとして來つて見れば若旦那のお話しに今日父上は多田權左衛門殿宅にて猿樂があるに依つてそれを見物にお出でなされ未だお戻りがまいと云ふ事を聞き久助は若旦那清三郎殿追々快氣の喜びを述べ我が宅へ歸らうと思つたが吉岡先生はお歸りが餘り遅いからヒョツとして……何時もや有馬温泉で大層は酒を深く召されて前後も知らずお寝みなすつた事があるから今日も今日とて多田權左衛門様のお宅で酒酌をなさされたやうな事ではないかと胸に浮んだのは常日頃此吉岡先生を主人の如くに思つて居る久助でございませうから爾うだくと胸に問ひ腹に答へて唯だ一人

多田權左衛門の屋敷へ参らうと丁度來つた杉林向ふの方へ二人ばかり驅出して往く奴がある、ハテ怪しいと思ひながら段々其處へ來て見ると一人倒れて居る者がありますから近寄て見れば斯は如何に大恩を受けた吉岡無二齋先生驚ろく八百屋の久助が 久「ヤッ、先生……」
 ……一發程呼だ時にマダ息は絶へぬと見へまして無二齋が兩眼を開き久助の顔を見て、無敵は佐々木岸柳……其お聲も誠に阿子の低い言ひ方、久「ナニ佐々木岸柳が敵でござりまするか先生お氣を確かにお持ち遊ばせ……」と云ふ内に早や此一言が此世の別れ途に息は絶へました。久「ヤッそれじやア佐々木岸柳が有馬温泉場の立合の一條から旦那様を今日此處で……それでは今二人向ふへ驅けて参りしは全く岸柳おらん、後追驅けてと言つた處が向ふは劍術の先生八百屋の久助じやア仕方がよい、それより早くお屋敷へ歸つて若旦那様に申し上げやうか、イヤ、若旦那様は病中、それより多田權左衛門様に申し

上げやうか、何うしたものだ、ア……イヤ、一層の事己れが岸柳を追驅けやうか、心は二つ身は一つコリヤ何したら宜らうなア……ナヨンと木が這入つて舞臺が廻りますると芝居のやうですがナカ、それ處ではない久助はお屋敷へ立歸つて若旦那様に知らせやうと思つたが病中の事故に顛倒なされて若し病氣が重くなつては相ならんと早速の利たる八百屋の久助直ぐに多田權左衛門の屋敷へ驅着けまして此様子を知らせると權左衛門は直ぐに一刀を手袂み懸着け來たる杉林、モウ先生の身体は冷たくあつて居る。權、ソレ久助、お自附へ届け参れ、お目附へ申し上げると早速役人達出張を致しました、然るに清三郎はマダ之を知りませんから多田權左衛門、お目附續いて大目附、久助も共に清三郎の枕邊へ來つて云々斯々と申し入れると……茲に諸君へ鳥渡申し上げて置きますが吉岡無二齋のお速合は今を去る事六年前に病死なされまして清三郎もマダ無妻で一人病の床に臥して

蔵 武 本 宮

父の歸りを待つて居りました清三郎之を聞くより直ぐ起上つて枕刀を執り、清三郎父上を佐々木岸柳が……立上つて二足三足驅出でやうとしましたたが病中の事故後へにドゥと倒れましたお目附大目附が「イヤお騒ぎあるな清三郎殿と取鎮め置き何は兎も角直ぐに浮城下の出口々々へ手配をしやうと其夜の内に手配りを致しました、然して無二齋先生の死骸を擔ぎ込もうと思ひましたたが權左衛門の計らひにて病中の清三郎殿へ父上の死骸を浮城下に入れては却て宜しくあるまいと直ぐには城下の浮菩提所へ其場から擔ぎ込みまして立派に葬式を致しました此時清三郎は定めし氣が落ちて仕舞つて尙は病が重るかと思つて人々心配を致しましたが其處は侍士の嗜み之では往かんと重を取直して一日くと快くありました尤も病は氣から生ずるもので君父の仇俱に天を敵かぬと云ふ考へがおりますから氣を勵まして病氣も割合に早く治りましたた彼是れ致して日數も二九七日三七日と過

蔵 武 本 宮

ぎましたたが兎に角此一條に就ては弟は當時肥後國熊本城主加藤肥後守殿藩中宮本武左衛門の養子となつては居るものゝ之へも知らせなければならんと書面を以て知らせました然るに清三郎は何分マダ病後の事故今仇討發足と云ふ譯にも参りませんで至極残念に思つて居ります又毛利輝元公も悉くお歎き遊ばして直ぐに全國の大名其他の領分等へもお頼みに相なつて佐々木岸柳の行方をお尋ねになりましたたがナカノ好智に長けたる奴何處を何う潜つて逃げて居りまするか更に相知らせせん今日と經ち明日と經ちまして早や四月五月になりました内に清三郎の弟七之助當時宮本武左衛門の養子宮本武藏政名が之へ乗込み來りまして兄清三郎へ對面を致し親しく兄と相談を爲し武兄上は病後の疲勞もあり敵を尋ねんと諸國をお廻りに相なる其内に又病に罹り身体を悪ふなされては宜しくあい敵は此武藏が討ちます。清併しお前は宮本武左衛門方へ養子となつて見

蔵武本宮

ればモウ宮本の相續人、武イエ、養父の武左衛門よりも許されま
した、實父の仇討をするに何の他より苦情を申し入れる者があるもの
かと許されて参りましたから兄上、侈心配あるな、殊に此武藏は是より
マダ國々を廻り、劍道の修行を爲し、父上が編出された二刀の流名を尙
は私が充分に日本に廣め我が名を揚げんと心得る、敵討は敵討、修行は
修行、兎に角、此處を發足仕りたいと爰で兄と約束を致しまして宮本は
毛利公の、侈重役、其他親無二齋の門人共と親しく此一條を談り合まし
て、遂に藝州を發足爲し、是より大阪に至つて足を止め、此處で宮本が賭
試合を致した杯と云ふ事を、今迄能く講談に述べまするがナカ、金
錢を以て賭試合をする杯と云ふソナ、卑劣な宮本ではございません、
是より武藏は都へ上りまして京の地、足を止める事、半月餘り、彼方ら
此方ら京見物と云ふは表向き、内心は岸柳の行方を探して居りました、
夫より都を去て近江路や關の清水の名も聞き、軒を并べし、大津の宿と

蔵武本宮

れをば過ぎて、粟津、暇勢田の唐橋打越へて、草津の宿に差掛り、是より兎
も角、中仙道を下り、上りは東海道を通らんと、中仙道と東海道の草津の
道分を左へ外れて、守山の宿、木曾街道を打過ぎまして、信濃路から出羽
奥州の果迄も、武術修行、又二つには親の敵の岸柳を尋ねんと廻る事、二
三年、それを過ぎて、武藏國へ入り、此度は東海道を上つて、上方路へ越
途中は東海道有名の箱根山園ら、ずも夥多の狼に出遇ひ、之を宮本が退
治ると云ふは、講談の眼目、宮本武藏の狼退治、一匹二匹の狼にあらす數
匹の猛獸を退治するには、鳥渡宮本も休息致さなければなりません
から、口演者も休息して、然る後に、狼退治に移りませう

第九回

扱宮本武藏の狼退治と申すは、名高き事であり、申す故に、此一回に詳
しく辨じます、能く昔しから「箱根八里は馬でも越すが越すに越され
ぬ、大井川と申します、之は昔し諸大名の参勤交代に、長持を擔ぐ人、只

蔵武本宮

力を揉出す調子歌で東海道の一の難所は大井川でございするが箱根山もナカ〜難所で川止めはあつても山止めはないかと思ふと爾うでない、大昔しは箱根の山止めと云ふ事がありました、何となれば之は親知らず子知らずと云ふ場所がございます、其邊りへ参りますると大風の吹く時杯は實に激しいもので容易に此處を通れません、夫が爲に三島の宿へ泊り或は小田原へ泊つて翌日の天氣模様を能く見定めて出立致します、若し山中にて風に巻かれますれば人間が忽ち命を落すと云ふ位な危険な場所、これに又狼の出す時があります、さうです、サウ年中出るものではないが送り狼と云ふのがあります、さうです、之は人間が通り掛りますると後へ尾て参ります、併しナカ〜容易に人間へ噛付くものではないさうです、頭りと足下を廻ります、故に大抵之にて凍んで仕舞つて往來へ屈むとか或は倒れるとか致しますると直に噛付くものでナカ〜立つて居る者へは滅多に噛付きま

蔵武本宮

せんさうですが遂には狼の方が奇つて来て後ろから前の方へ頭まの上を飛びます、大昔しの話ですが一人の六十六部がありました、笈を背負ひ六部の事ですから笠を冠つて通りますると狼が送つて参りまして、其内に一匹の狼が笠の上をヒョイッ〜と二度ばかり飛越へた時にモウ是迄と覺悟を致しました六部は用意の懐劍の鋒を自分の冠つて居る笠の上へ三寸ばかり出して持つて居るとは知らずして眠が後ろから笠の上を飛びまして遂に咽から腹を裂いて死だと云ふ事が或る書にも出て居ります、茲に武藏先生は通り掛つた東海道小田原の宿も早や過ぎて箱根山の麓迄参りますると一軒の立場茶屋がございますから其れへ道入つて食事を爲して、無爺さんや、是からソロ〜越さうと思ふが何うだらう、爺、ハイ左様でござりまするか、今日はお越しに参りますと日が暮れて仕舞ひます、ソヤア山へ今晚お泊りに参りまするか、武山とヤすは………、爺、左様でございます箱根の

藏 武 本 官

宿でございます。武「ア、左様か、今日一日には越せんか。爺、ハイモロ今頃からお出でになりましてはナカ〜越す處ではございません、ナシなら斯様な不潔い立場ですがお泊り遊ばしては……」武「イヤ〜、少し思ふ事あるに依つて夜道も厭はず越すのじや。爺、ソレはお氣を付け遊ばせ、夜道も厭はずと仰しやいますか、晝間でも登つた口杯は厭が
出て参りますから夜分になりまると尙更の事、此節はモウそれが見
に大抵晝十二時から二時々分迄の間より外は山を越さぬ位でござい
ます。爺さんが親切に申して呉れますが併し之も修行の一つありと
思ひ厚く禮を述べまして茶屋を立出で夫より段々箱根へ登つて往
く、此處に三枚橋と云ふがありまると之は名高いものでありまして其橋
を過ぎますると向ふは湯本の村、只今温泉杯があります所は右方に
當つて居ります、之を段々登つて参りますると向ふに小瀑があります、
尤も只今でも湯本の脇に信夫ヶ瀧と申す瀑が三つ程に分れて落ちて

藏 武 本 官

居ります、里人呼で一名初花の瀧と云ふ、登勝五郎の妻初花が此瀧に掛
つて良人の病氣を祈つたとか言つて今だに初花の瀧と申します、併し
宮本の通つた時分は其名はありまします、段々と参ります内にモウ、
ソカ〜日が暮れ掛つて来たが十八日の事でございします、依つて月
も出ますから道に迷ふ氣遣ひもあるまいとブラリ〜と参ります
と後から ○「オイ、旦那、少しお待ちあすつて……旦那へ……呼ぶ者が
ある、武藏は振返つて、武「ア、何じやな」○「旦那何うです、歸り駕籠で
すが乗つて下さいませんか、武「フ、何方らへ歸るんだ」○「三島の方
へ歸るんです、乗つてお呉さい、無、イヤ、ダ駕籠に乗る程疲れて居らん」
○「爾う言はずに何うかお乗あすつてお呉さい、駕籠昇あんなアモウ何
でも旦那方を見りやア乗つて頂だかなくちやア營業にあらぬ、廉く参
りやすから三島迄……」武「併し三島へ歸ると云ふがナカ〜、今晚三
島迄は往けまい、箱根へ泊らうと心得る」○「ナ、ア、旦那今夜月夜です、

三島へお出でになるから今夜中に三島迄小荷が仕事をしますから何
うかお乗り下さいと云ふ駕籠昇の様子を見ると、デッブリと太った腕
節、何となく一癖あり氣さ男、不潔い褌袴を一枚着て三尺帯の代りに紐
を締めて頻りと鞠めて居る、武藏先生の量簡では、ムー此奴事に依ると山
賊ではあいか、旅人を見ると無理に駕籠を鞠めて廻へ連込み路銀杯を
取る事は數々あるけれども、此方からは宮本先生少しも驚かず、武ハ
爾うか、それじゃア乗らうか。○へー何うかお乗り下さいアせ、モウお
幾らでも宜しうございあす、俺は空想籠を擔いで往た日には却て早く
道が歩けません、仕事をして居りやア歩けるんですから、何うか一つお
乗り下さいあせ、武ハ乗らう、併し棒組は何うしたんだ。○へ
一棒組は向ふに居りますから今持つて参りやす。武ハ二向ふに居る
から持つて来る……○へー……武面白く奴じやなア、武藏も不審
を打ちまして此方の石に尻打掛け、此駕籠屋は妙さ男だ、棒組が向ふに

居るから連れて来ると云ふのが當り前だのに持つて来るとは怪しい
と思つて見て居ると、○且那少しお待ちなさいと山駕籠を其處に下
して突然向ふの方へ参つて石を一個抱きまして軽々と其處へ持つて
来ました、爲る事が不審ですから政名先生「何だそれは。○へー之が
私の棒組です。武ハ、お前の棒組とは……○此奴が片棒擔いで
歸りやすから、私が片棒擔いで且那を乗せて往きやす。武何の爲だ。
○へー、私はモウ何時も一人です、棒組があると氣が合ひませんで往き
ませんから年中此石を片ッ方へ付けて而して私が擔ぐんです」武ハ
、ア之は恐れ入つた、餘程お前は力があると思へる。○へー、別に澤山
もありませんが……サア且那擔はずにお乗なさい、威程其管だ當り前
から駕籠が真中にあつて棒の先さが左右に出て前と後ろで擔ぐので
すが之は駕籠が棒の端に付いて居つて此方らの棒の端へ繩を以て石
を括り付けて真中へ這入つて擔ぐ物を荷ふと同じ事です、ございませすか

ら武藏も面白く思ひ。武ヤア之は面白い奴じや、乃公をナニか乗せて擔げるか。○「エー戲言々ちやア往けやせんお相撲さんが茶やふと何んな重い人が来やうと棒組が石で口を利きませんから恐怖も言はず、それに量簡は堅いし……武、それは石は堅いに極つたものだ。○「一番氣が合つて宜うがす、サア且那お乗あさい面白い奴である。武藏も喜んで駕籠へ乗りました、併し此山駕籠へ乗つけません。お方は少し振られますると、駕籠の棒で頭をコッソ〜と打ちます、グツと反て脊中を後ろへ押付け前の方へ足をやりますれば宜しうございませすが、乗つけぬ人は真直に乗るから往けません、武藏は國々を廻りましたのが、山駕籠は固より種々旅の駕籠にも乗て居ります。故乗方は旨い。○「ヤツ且那感心々々、旨うがす。武藏先生大小を膝の所へ載せて。武、ソラ宜いか。○「へい宜しうがす。突然ウンと擔ぎ掛けた時に武藏殿も面白い奴じやと思つてお調弄ひなさいまして。武、オイ、駕籠昇、其石は

何の位重味があるか。○「爾うです、ねい、マア且那の体位が二十貫は無、十五六貫位でせうか。尤も宮本武藏は小兵あ人でありましたさうです。○「大抵マア十五六貫位かものでせう、石も大抵其位……武、サア乃公を乗して擔げるか。○「戲言を言つちやア往けやせん、宜うがすか。と云ふて息杖もなく真中へ這入つてグツと一ツ肩を入れた。○「且那、ナカ〜重うがすな、マア武、何うだ……此折宮本が右の手を出しまして、松の根へ捉まつて居る、ウンと擔がうとして。○「ヤア且那、餘程重い……是じやア重い譯です、それをグツと腰を切ると武藏の持つて居た松の木の根がボカリと取れた、之に武藏は驚いて。武、ヤ、ナカ〜剛い奴だ。○「且那、戲言やつちやア往けやせん、お前さんが両方の手を出して捉まつたつてソナ事に驚ろきやアしない、サア宜うがすかい。स्ता〜擔ぎ出す、成程二人で擔ぐより一人で中へ這入つて擔ぐ方が、乗心も宜うございませう、前に石を付け後には宮本が乗て居る、其駕籠をサ

蔵 武 本 宮

モ輕さうに鼻歌杯を歌ふてツンとくく山へ上つて往く。○旦那是から少し場所が悪うがすよ怖がつちやア往けませんよ。武ナニ怖い事はない。○宜うがすかい。武、オーモウ月の顔も出た夜道を往くのも樂しみだ。只今の箱根山とは違ひまして其時分の事ですから道と云つた處が碌な道はありませんで或る時は旅人が生茂つて居る辻を拂ひ道を開いて往く位でございます。武藏は駕籠の中で腕掛いて希代な奴だ、モウ餘程の道を擔ぐのに先刻から更に肩を換へぬ不思議な奴だと考へて居ります。大抵モウ一町或は二町と往けば何ぞ駕籠昇でも肩を換へるが此奴右の肩へ擔いだ儘モウ一里餘も来てマダ換へない。武、時に駕籠屋……○「ハイ」武實に感心じや、お前肩を換へないではないか。○「へー面倒ですから併しモウ此處いらでソロロ換へませう。是より上つて参りますと、ドウツと大樹にあたる風の音は物凄く夫より段々と嶺上の方へ掛つて参りまして下の方を見るとモウ

蔵 武 本 宮

ーツと谷の流れの音が聞へる、深山にて谷の音を聞くは随公物凄いものでございます。其谷際を歩きながら。○「ドリや肩を換へやうか」と云つて突然ドツと右の肩から左の肩へ廻す、之は廻し肩と云ふのでございませぬ、此時宮本がヒヨイツと此方を見ると肩を廻しましたから全然武藏先生の乗て居る駕籠は崖を離れて谷の上の所になりました。武、コレコレ、駕籠屋危険いぞ危険いぞ……○「大丈夫だ、旦那落ちた處が五丈か六丈下の谿へ落ちるまでの事だ」武、爾う御香お肩の換方をするな。○「ナアに落ちちりやア落ちちりたまでの事だ、旦那怖うがすか」武、之は怪しな奴だ、又二三町往くと云ふと肩をグツと廻す、調弄ふのですか時々谿の所へ宮本の駕籠を廻す、それですから武藏の乗て居る駕籠が前へ来る時は駕籠屋の方を向いて乗て居なければならん、又後ろへ廻る時は駕籠屋の背中を見る、グルグル面白づくに左と右へ廻すから。武、コレコレ、好い加減に致せ、御香お肩を○「旦那少し怖く

官本武藏

なつたかね宜うがすろれじやア今度肩の換やうを變へやせう。……早
や夜も八時々分に相なりまする段々と上つて来て今度は廻し肩でな
く突然両の手を棒に掛けるが否やエーッと指上げたアー危険いと思
ふ内に左の肩へヒョイッと載せます又十間程住くとエーッと云つて
両の手で脇籠をグツと指上げる實は之は世に言ふ大力を過ぎて怪力
どでも云ふのでせう脇籠屋は巫山戯ながらエー……始終肩を換
へるから武藏は脇籠の中でヒョイ……踊つて居る。武脇籠屋ア少
し待つて呉れ」○旦那大分貴殿もお疲れさすつたやうですぬ脇籠へ
乗つて居ても疲れの出るもので……ちやア此處らで一つ立場をしませ
うか」武ムー其處へ下して呉れ」大きな杉の木根がたの所へ脇籠を
下しまして。○サ一旦那一服やりやせう」武此處は何と云ふ所か
○向ふに見へるのがアレが湖水此近所を誰が名を付けたか知らない
が賽河原とヤしやす極樂と云います」武ムー之が箱根山で名高き

官本武藏

賽河原か ○爾うです極樂もあるかと思やア地獄もあるサ一旦那今
日は俺も心持能く仕事を致しやす其言葉の様子と云ひ爲る事に宮本
が大きな氣に入りました。武面白いかア脇籠屋感心したよお前の今
日の力には」○お待ちなさい今煙草の火を拵らへますから」纏て煙草
の火を拵らへ。○旦那ソナヌ寒かアねいが一あたり當りやせうか
ね木の葉を集めて參つて焚火を致して當りながら。○旦那貴殿はナ
ンですぬいお身は小さいが体はスツカリ鍛ひてゐると見へてナカナ
カ目方もございますなア」武ムー乃公は身体が鍛ひてゐるから目方
もあらう」○旦那何うですエ少しお寝みなさいなナニ連も今夜山を
越して仕舞ふ譯にやア往きませんから」武脇籠ン中で擔がれながら
寝ると云ふものは好い心持だが本統には眠られぬものじやのう」○
チッと旦那お寝みなさい私も此處で澤山寝なくても一時計り眠りや
ア宜んです爾うして往くと三島へ丁度夜明方に往きやすから旦那

藏 武 本 宮

それですから山道を歩く時には火繩を振って歩くと云ふ、此時駕籠屋は
焚火の火がマダ残つて居たのを皆消して仕舞ふから 武、コレ、駕
籠屋、何で火を消すのだ。○ナニ、狼が火を嫌ふから消してやるんだ、面
白い、来た、サア旦那お前さんもお侍士だ、此狼を皆殺してお仕舞
いなさい、武、コレ、駕籠屋少し待て、○オー、来た、来
た、と云ふから見ると目ばかり光つて体は能く見えませんが五十
匹居るか百匹居るか分らん位、共容易に側へ寄つて噛付きは致しま
せん、○ヤ、面白、サア旦那……突然手拭を取つて向ふ鉢巻をし
て石の上に大安坐をかいて、○サ、旦那之で見て居るからお殺ささ
い、武、コレ、其方何じや知らんが、狼の方へ力を付けるやうじやな
いか、○ナニ旦那の御様子を見んるで……政名先生はヨシ、
之も修行の一つあり、我れは親の仇を討たんと諸國を廻りし者あるに
茲に於て狼に出遭ひ命を取られ、ば夫迄の事、武術修行の一には斯う

藏 武 本 宮

云ふ獸を退治するも之も劍道の一つありと禱を掛け、支度となされ
て、右の手には大刀を持ち、左の手に小刀を持つて、廣き場所へ立上つて
居る所へ四方八方より夥多の狼が一時に向つて口を開き、今や武藏先
生へ噛付かんとする勢ひ、此折、駕籠屋は石の上にて見て居たが、武藏が
刀を抜たから、○ヤ、先生容易に切りやア往けぬ、往けぬ、向ふから
飛付くの待たさくちやア往けぬ……ソレ、先生左を拂つた武藏は
充分に瞳を定めて前の十匹程を見て居る内に、突然左の方からが、と
噛付く、狼、ア、武藏殿は左の股へ噛付かれしと思ひしに、小劍を執つて
ハラリ拂つて、其狼の首を落す、然れば人間が喧嘩をしても同じ事、仲間
の者の血を見ると気が大きくなる、と云ふ位、今迄は唯だ取巻て居た狼
が武藏の爲に一匹の友が切られたから、外の狼も一時に武藏先生へ噛
付て来る、宮本武藏が兩刀の極意を以て、右劍と左劍に數十匹の狼を退
治ると云ふお話し、一寸休息して次回にやし述べます

宮本武藏は両刀あればこそ、之が防げますがナカ〜一刀にては容易に防げません、尤も何流でも、切返しと云つて四方へ向はれたる四人を相手に一人で受ける事もある、大抵前を防ぎまするが然はさくして、後ろの方を防がなければならぬもの、四方八方より飛び或は又武藏先生の頭の透りへ噛付く狼があります、其内武藏は右劍と左劍を互違ひに振りまして右劍を以て受ける時は左劍を以て切込み、左劍で受ければ右劍で切込みと云ふのが此人の術です、然るに狼の事ですから、數十匹体に飛び参りました故に之を切るナカ〜容易の事ではありませぬが後に名を遺そ程の名人でございますから、忽ちの間に十四五匹を切ると又候向ふの筈、間から三十四程参りました、流石宮本先生も此時は大に困つた、人間を相手に真劍立合をするよりか、尙ほ骨の折れる、と云ふものは向ふが及物を持って向ふなら之を受けまするが然は

さくして飛び付くのでございますから、少し隙があれば左と右より一時に来る、之を一時に拂はなければならぬから、真青になつて仕舞ひました、中には宮本先生が笑ひながら狼を退治した、杯と云ふ事をやしまするがナカ〜爾う云ふ譯のものではありません、數百匹の狼を相手にしてお居で遊ばすが爲に鬚の毛も逆立て参り、マダ何程来るか分らんと、思ひ餘程持餘して身体も亦疲れた様子を、今迄腕組をして月明りに透し見て居た、駕籠昇が「旦那、ナカ〜ソナ事じやア今夜中に皆退治する譯にやア、往かねい、お助太刀を致しませう」と云ふより早く石の上より飛び下りて、其處へ飛込で来て何をするかと思ふと、突然狼を一匹殺しました、すると狼は宮本の方へ向ふのもあり、又駕籠屋に向ふのもある、○コン畜生乃公を誰だと思ふんだ、三島の三次だ、年中此山ア登つたり降つたりして居る乃公に向やアがつて喰ひ付くか、サア面白い、此駕籠屋こそ笑ひながらです、突然右から飛び来て来る狼の鼻づらを、

て往きませう」武「ム、モウ大丈夫か」○「エーモウ大丈夫です、モウ一
旦狼が降参をして逃げたんですから来る氣遣ひはござんせん」武「お
前は感心だなア、能く狼の事を知て居るなア」○「へーモウ彼奴等と仲
間みたやうなもので……今夜来る氣遣ひはござんせん、マア旦那お待
ちござい、是から焚火をさせよう」又焚火を始めた。○「旦那お腹が減り
ましたか」武「ア、大分乃公は空腹になつて来た」○「宜うがす、チャア
旦那に湯飯をゆゆ走しませう」徳籠の屋根に結び付てありました麻の
袋より六七個の焼飯を取り出して武藏にも與へました、空腹の時に粗
味の物なく武藏も二三個之を喰ひました。○「旦那貴下はナンです、ね
い、劍術位ひです、さア」武「イヤ、鑿劍家と云ふ譯ではないが……」○「何
うです、旦那一つお立合を願はうしやアございませんか」扱はど考へま
した先生「ハ、ア、して見ると此處で今狼を打殺し、或は引裂いて退治し
たる様子はナカ、尋常の者ではないと心得たが扱は之りや雲助と

姿を變へて居る柔術家か、或は劍客じやなと思ひ、武「オ、面白く、
今お前が狼を退治した腕前、又拙者が兩刀を持つて狼を切つた所を見込で
立合とは……」○「旦那お待ちませい、幸ひ向ふが荒人明神様彼のお社
前が好い場所、彼處で一つ立合ひませう」武「此月の汗へたるを幸ひ一
本立合を願はうか」○「ヤ、先生、傍郎、お言葉、サア此方へお出でな
さい」少し離れたる所へ來ると向ふにお鳥居があり、其お鳥居前
の所へ來て。○「旦那お待ちませい、旦那も何か木刀がなけりやア、往き
ませませい、今私が木刀を持つて來ますから、見て居る内に社の後ろへ參
つて一柁にしてある木刀を持て來て。○「サア旦那、此中で貴下の手に
合ふ木刀をお持ちなさい、見ると長い短かいもあり、或は細い太いもあ
り、武藏が毎時持付けの木刀の如きも五六本ありますから、少し長い
のを右に持ち、短いのを左に持つて、武「サア、然らばお立合致さう」○「宜
うがす願ひませう、此雲助も其中の木刀を一本取て。○「サア先生、

宮本武蔵

のお腕前恐れ入た「武」シテ「」 彦身は……「〇」然れば吾こそは紀伊國の産關口彌太郎とヤす者「武」オ一扱は豫て承る彦高名の關口先生、何故雲助の姿には……「」強一人間一生涯皆修行手前も日本國內を廻り諸所道場をお尋ね申して立合も致し又斯く身を落して在ると云ふものは山に登つて木を敲き、露に下つて岩石を碎き長年の間一派を編出さんと苦心を致したは即ち此飛切りの術、雲助と相なつて道々武家と見たら乗て貰ひ、其武家を捉まへては此邊りへ連参り、狼狽に驚いて逃げる武家は取るに足らず唯だ仕事をして三島へ送り、腕のある方々に就て立合をしては我が腕を堅めて居る彦身も修行拙者も修行三箇年此邊りで飛ぶ事の稽古を致した、夫れが爲に漸う高き所より低き所に飛下り、低きより高きへ飛上かる此術を、昨今にして少しく極めたり、何でも修行は爰でござる宮本先生も關口の名を聞て居つたが爲に「武」ヤ、ソレは圖らず關口先生にお目に懸つたのは誠に辱けない、又只今の

宮本武蔵

飛上りの術には實に感服の外ござらん如何致して其術は……「」強武藏先生彦身が今兩刀にて打込ひ氣合を先刻より拙者は充分考へたから飛上り申した、併し之にて手前も一の効を得たり、其飛切りの術は斯く致して、失禮ながら彦身にお譲り下さふと遂に夜明方迄五六十返宮本に此飛ぶ術を教へました、武藏は實に喜んで虎に翼を得た心地然れば此處にて關口彌太郎から飛ぶ術を授かりましたが爲に佐々木岸柳を討つ時岩石碎き燕返し、の早業をも難なく避けました、それは敵討に詳しく申し上げます、扱爰で關口彌太郎先生の生長から此人の履歴のお話にもあります、が、それを演じますと肝腎の敵討が近うなり、する故關口流と一派を開いた傳記、飛切りの術のお話しは是迄に止置きます、實は武藏が關口彌太郎に飛切りの術を教はつたは一夜ではございせん、山に居る事凡そ一箇月餘りにて自分の術をも彌太郎に譲つて所謂武術の交換をしたのが實際でございます、ソレで關口も聞も

なく箱根を去て紀伊國へ立歸り宮本先生も彌太郎に別れを告げまし
て一先づ肥後の熊本へ歸らうと云ふ積りで先づ箱根山を下り伊豆路
を過ぎて駿河路や大井川を打越へて金谷の宿へ上がり段々と遠州路
をば後とに爲し三河國岡崎へ参りまして圖らするも亦一人の柔術家に
出會ひ此處にて宮本が又一の妙手を受継ぐと云ふお話し

第十一回

扱武藏は箱根山にて關口彌太郎と互ひに妙手を取換へ夫より伊豆國
へ参り伊東一刀齋と鍋蓋の試合をした杯と或る本にもありますし又
講談師社會にても演説をするが之は大きに相違致して居りまして其
時分は伊東一刀齋は伊豆には居りません又如何に達人と雖も鍋蓋の蓋
を以て受ける杯と云ふ事は初對面の人に向つての禮ではありますま
いアレは所謂草双紙に作つた宮本武藏のお話しですから其腰味たる
所は演じません是より岡崎の宿に参ります尤も道々街道筋に劍術の

稽古場或は槍術柔術等の道場があればそれを尋ね日を重ねて岡崎の
宿へ参りマダ早うございませぬが疲れても居りますから旅宿を取ら
うと傳馬町の兩側を眺めて通りますと或る一軒の宿屋で若い者が
若お早うございませぬお泊り様じやアございませぬかお早うございま
す頭りと呼込みませぬ故武藏は一人旅だが宜しいか若へーお
一人様でもお二人様でもお半人様でも宜しうございませぬ武コリヤ
若い者一人二人は分つて居るが半人と云ふのは何か……若へ
いお半人と云ふのは眼一で敵でございませぬ武藏言を言ふお主人は
それへ出て参りまして主お早うございませぬ二今晚は少々宿が込
合つて居りませぬが何うぞ侈不承を願ひませぬ武ア宜しい主コレ
竹の二番へお通しやしな之は三河屋惣助と云ふナカノ大きい
宿屋でございませぬ下女が來つて六疊の室へ案内をする其内に入浴も
済み武藏先生食事をして居ると何となく騒がしうございませぬから

給仕女も聞くと隣の十疊の室に相撲取が十二三人泊つて居るとの事、尤も之は其時分の事ですから勸進相撲ではございませぬ、大昔しは節會の相撲と云ふ之は古代の事でございまして大關や脇杯と云ふものが出来たのは寛永の十九年七月の十七日に徳川將軍より許され江戸表四ツ谷鹽町に小屋を装置ひまして此處で木戸錢を取り沙免を蒙る書現はしまして所謂勸進相撲、其時分の即ち兩大關の元祖が東を明石志賀之助西が仁王仁太夫之が大關の元祖でございませぬ、其昔しは大關を秀手役と申しました併し是等は相撲のお話しですから茲には略しまするが其時分は因々に相撲が澤山ございまして早く言ふ芝相撲草相撲杯と云つた時分で三河屋へ泊り込みました相撲は何れも尾張或は美濃邊りから来て駿河路へ廻るものと見へまゝて皆各自に大きな聲をして話しをして居るもあれは或は痔薬を伸ばして貼て居る者もありませぬ、其内に夜も十時過にあつて表の方も段々と往來が寂しくあ

ると「按摩針の療治按摩ア」と云ふ聲が耳立つて聞へる、すると一人の相撲が「オイ、姐さん彼の按摩を呼込で呉れ」女「お相撲さんおよしなさいませ」相「何だ……」女「何だか知りませぬがね彼の按摩はナシでございませぬ、横柄を按摩で呼込みますると何方がお客だか知れないやうな奴で憎らしい按摩さん、およしなさいませ其内にモウ一人温和しいのが来ますから、それを呼びませう」相「イヤ、何でも構はない呼で呉れ、ドンおに威張る奴でも己れ達ちやア相撲取だ、驚ろかねいから呼で呉れ」女「ハ、爾うでございませぬか三階の窓から、女「モ、按摩さん」按「ナニ呼ぶのか、オ、今往つてやるぞ」女「ソラ、沙免ささいお相撲さん、大きな事を言つて居ますよ」相「何でも構はない呼べ……」處へ這入つて参りまして、按「ア、相撲取か、揉で欲しいと云ふのかの……」天きにお相撲が驚ろいて、相「ヤ、剛い事を言やアがる」と見ると総髪で年の頃五十にマダならぬ位、四十八九とも覺しき目のギョロ

ツとした一癖ありさうな男短かい木刀を一本差して膏藥を入たる箱
 を持つて按針の療治導引杯と鏡舌りあがら座りまして、按「サー揉
 でやらうかの」○「オイ」二子山「汝れ先きへ揉で貰へ」△「諾し己ら
 揉で貰わう……」○「オイ」按「摩せん、チイツとナンだよ、強揉でなけりや
 ア往かねいよ、素人は力が無いから柔ちかく揉で貰ふと云ふが己れ違
 が肩が張た日には力が満ちて堪らんから強く揉で呉ねいさ」按「取的
 旨い事を言て居るの……」△「何じやい取的とは……」按「強う揉でや
 るが宜いかな」△「サー宜い」二子山と云ふお相撲さんが両肌脱で
 △「サーやつて呉れい」後ろへ廻つて是から揉始めました、按「何うだね」
 △「エー、ソん事じやア利かねい、モ些と強く揉で呉れ」按「ハ、ア、モ
 ソツと強いが宜いかの之じやア何あもんだ」△「マダ左様な事じやア
 利かねい、モツと強く揉で呉れ」按「此位か」△「それでも利かん」按「ハ
 、ア、驚ろくなよ」△「ナニ驚ろくもんかい、按「それじやア宜いかホラ、

エーイツ……」と聲を掛けると二子山はウン轉倒つて仕舞つた、側に見
 て居た相撲が「ヤー飛でもない事をさッしやるな、按「此お相撲が強
 く揉め強く揉め杯と生意氣を吐すに依てチヨイと殺して見たのだ
 相「酷い事をしやアがッて何うする、按「イヤ」今活かしてやるは……」
 又抱き起してヒョイツと何處やら揉むと云ふと直ぐ氣が付いて△「
 ハ、モウ惨免だ」○「何うだい二子山此按摩は……」△「ヤ大變あ
 按摩だ己れを殺しやアがッた、○「我慢は出来ねいか」△「出来ねいッ
 ム、エーイツとやられた日にやア己らアモウ氣が違くなつて仕舞つた、
 汝れ一つやつて見る」○「諾し……」と云つて瀬多川と云ふ相撲がそれ
 へ出て「瀬「コレ按摩せん……」按「宜いか、一つやるせ」瀬「ム、やつて
 呉れ」按「矢張りお前も強揉みかな、瀬「己れも強う揉で貰わう、二子山
 とは違ふからソツカリやつて呉れ」按「何うかな、瀬「マダ」ソんな
 事じやア利かねい」又力を入れて、按「何んあもんだ、瀬「マダ利かねい

藏 武 本 宮

接「オー大分強いな、それでは堪へられるかやつて見やうせ、ヤッ……」又
瀬多川が顛倒へる暫く経つて又活かす、相「ヤー面白いく、此按摩さ
んは揉で見たり揉殺したり、爾うかと思ふと活かす之は自由な事をす
る按摩さんせや、已れが一つやつて貰はう、今度は其お相撲さん達の中
でも頭ら株の阿武の森と云ふのが出て、阿「サーッカリ遣て呉れ接
摩が阿武の森の身体を見て、△「ヤお前は少し骨があるな、阿「馬鹿な
事を吐け、骨の無い奴があるかい、△「今の二人とは少し違ふ、此位太つ
て居りやア少し揉心地がある、そら何うだ、大「マダソンな事じやア利
かねい……ヤイ二子山瀬多川汝等ア何だい之しきの揉方に痛い、
と云つて驚ろくたア、コンな事は平氣ももんじや、ソラモンツと奮發や
つて呉れ、△「宜いか、何うだ、阿「マダ利かねい、△「之でも利かぬか
阿「マダ利かねい」と流石阿武の森は我慢をして居る内に段々くど強
揉にあつて来るから少し、阿武の森も驚ろいたが我慢をして居る内に「

藏 武 本 宮

△「何うぞやア、エーイツ……」と云ふ、ドタンと倒れる、一回「ヤ又やられ
た」と云ふ内に又活かす、之を見てお相撲さん達二十人計りが皆呆れ返
つて之りやア危険な按摩だ己らア免だ免だど騒いで居る、宮本先
生は先刻より隣座敷の相撲取がワ〜云ふ聲の爲に寝られません
でウツラ〜として居る内に、ヤ、エーイツと云ふ聲がする、其按摩は
武術に適つて居りますから唐紙を細目に明けて見て居ると三四人の
相撲を一時殺し、又活かす、宮本之を見て之りやア柔術家だな、相撲共は
氣が付かねが柔術の妙手を以てやつたのだ、之は面白いと思つて手を
打くと宿屋の下女が「ハイ何でございます、誠に今晩は騒々しくてお
氣の毒さま」武「イヤ〜騒々しいのは掛はんが隣室に居る相撲の中
に行司が一人居るやうだ、女「ハイ、向ふの隅で笑ひながら見てお居で
あさる、アレが行司の源助さんと云ふお方でございます」武「ムー爾う
か鳥渡呼で呉れまいか……ア、コッヤ〜按摩に知れないやうに呼で

百三十六

呉れ 女畏りました是より下女が行司の源助に此事を言ふと何事かと思つてソツと此座敷へ来るを武殿は側へ呼で、武お前が行司さんか、お前達は気が付くまいが今彼處へ来た怪しな按摩が二三人の相撲取衆を強揉だ〜と云つて一時殺しては又活かす様子、アリヤア柔術取りだ 行、ア左様でございますか 武お行司さんでも気が付くまい、ソコでな私もア云ふ按摩に一つ揉で貰ひたいもんだけれども私か今此處に泊つて居る侍士と云つては往かんからお前の弟子の行司だ〜と云つて私が彼處へ這入るから何うか含んで居て呉れ 行、ハ一宜うございませす、之は面白い〜、畏りましたとございませす按摩は又外の相撲を今度は當り前に揉で居りませす行司が向ふへ歸つて暫く経つと宮本先生が椽側の所から 武、ヤ一皆の衆大層揉で貰つたか外のお相撲さん達は妙も顔をして何が這入つて来たと思つて居ると 武、モン、按摩でん何うか其仕事か濟たら私を一つ揉で貰ひたい按摩は振返

百三十七

つて 武、ハ、アお前は何だそ、武私に行司源助の弟子で行司見習ひの者……… △ハ、ア行司………何と云ふ名だニ 武源助の弟子で………源助の弟子で……… △何と云ふんだニ 武源吉と云ふ者です、△ア一爾うか揉でやらうか、武、ハ一揉で下さい其内に外の相撲が濟ひと宮本先生其處へヒタリと座つたから今強揉をされて目を廻した相撲さん達が互ひに顔を見合せて妙も者が来た中には彼れは先刻隣の座敷へ泊つた侍士じやアないか此按摩も普通の按摩ぢやア無い之りやア面白いと密々囁いて居る内に突然揉始めて、武、コラ〜お行司さん、お前は大層身体が小さい故強揉は往くまいか、柔らかな揉でやらうなア 武、ヤ何うか強う揉で貰ひたい △コンナ小さな身体で………武己れは体は小さいが平生から按摩に掛つては強う揉で貰ふのが樂しみだ 按、爾うか、ハ一宜いかあ、ヤツ………と云ふ掛聲で揉で来る武殿は揉まして居ながら考へて居ると成程柔術の手がチヨイ〜ゝある、エ

蔵 武 本 宮

「イツと強く力を入れた時にお相撲さん達は自分も力を入れて居りますから尙ほ痛い、宮本先生は向ふで力を入れるとヒヨイと氣を抜きますから少しも痛くない、按、何うだ」武、ハ、ア按摩さんそれじやア些ども私はマア利かさい 按、ナニ利かさい………之で………」武、オー利かさい、モウ一つやつて呉れ 按、宜いか、ヤツ………「平氣で居る、按摩も少し驚いて此行司は体は小さいが剛い奴だ、モウ是迄と思つたから有ん限りの力を込めて、ヤツ………」と云ふ聲を掛けられた時に大抵なら其處へ順倒つて仕舞はなければならぬのに武藏先生は「エーイツ………」按摩の掛聲と自分の掛聲と合ふやうにして向ふの手首を捉まへて後の方へヒヨイツと体を引く途端に按摩が「ヤツ………」と「ボタン」………忽ち三室向ふの座敷へ按摩がヒヨイと飛びました、お相撲は驚ろいて「何じやや々」と云ふ内に向ふの座敷も立上つて、按、イヨオー行司ナカ〜やり居るな………」ア相撲は驚ろいて、相、妙だ、あア何だい、一体化物同士の

蔵 武 本 宮

寄集りか「杯と云つて驚いて居る、此時宮本先生が「時に按摩殿感心な致した」按、何う感心をさされたの」武、手前が氣合にて手首を取て身投げた、投げられた身は手前の襟へ………」と武藏が右の手にて首筋を押へますると丁度首筋の所に膏藥が二枚貼てありました、之は宮本が按摩の右の手首を取て「エー」と投げる時に左の手にて箱の中にあつた膏藥を取て早くも武藏の首へ貼た按摩の早業、真劍ならば武藏は首を切られたも同じ事でございます、武藏は感心をして、武、恐れ入た、何うか願くは尊名を承りたい 按、シテ身は何人だ………」武、若年故に手前から姓名を名乗りませう、拙者は行司源吉杯とは詐り、實は肥後熊本の臣宮本武藏政名でござる 按、オー扱は貴殿が宮本先生か、ムー然もありません、二度三度手前がエーヤツと云ふ掛聲で強く揉だ、それを一々氣を抜て力を弛める、之りや尋常人ではない、柔術取とは見受けぬが何れ武術の修行をさされたお方と見たが扱は宮本氏か」武、シテ、

藏 武 本 宮

お手前は……按拙者は竹内常陸之助でござる「武」ナニ扱は竹内先生であつたるか後へ下つて武藏は両手を支き事鄭率に言致して置きませするが之を寛永の宮本と稱へて常陸之助を加賀之助として講釋師が皆讀で居りませすが竹内加賀之助は宮本先生が老体にあつた時分は壯ん赤人で實地を調べれば能く分りませすが茲に竹内中務大輔久盛と云ふ人がありませした之は小具足捕手の遠人で元此人は作州津山の城下波賀村の人で自ら竹内流と一派を廣めませした柔術の方ではナカク古い先生澁川流杯から見るとズツと昔々の事でありませ此人は天文元年六月二十四日に死去致しませた此人の子が竹内常陸之助と云つて今按摩にあつて居りませしたのは此人です此常陸之助の子が加賀之助で之は中務大輔の孫でございませして寛永の時代に京都川東に道場を出して大層行はれた人でございませ夫故に按摩

藏 武 本 宮

にあつて居たのは加賀之助でございませんで其親常陸之助久勝と云ふ人でございませ之が實際ですから貞玉は斯く演じませる其常陸之助が何故あつて按摩導引杯をして居るかと云ふに吾れ一代の内に人の体だを扱ひ事一万八千人と云ふの願を掛けたと云ふ事尤も一代按摩で送ればそれは扱ひませうけれ共僅かの内ではナカク大變でございませう人の体だを扱ひで見れば皆身体骨組が違ふもので詰り接骨醫杯は柔術取の先生方は皆出來ると云ふものは身体の急所々々骨組の工合をチャンと心得て居るから出來るのです夫れを能く究めたい爲に願を掛け斯く修行をして歩く併しそれには竹内常陸之助では往けあから按摩の常平とか常藏とか出鱈目の名を附けて國々を廻つて居たもので此岡崎の宿に十日計り居りませして圖らずも今日宮本先生に出會つたのでございませ武藏は鄭率に武ヤ之は竹内常陸先生でありませたるか誠に無禮を致した何とまれは先刻お手前が相

藏武本宮

撲の強様其度々の掛聲が武術に通つて居るが爲に唐紙の間より隙具致して武藏と名乗らず行司杯と詐つたは甚だ恐れ入つた「當イヤ、其様な交渉扱では却て手前が面目ない、手前も竹内常陸之助を按摩杯と云ふのは之も矢張り修行の内、異なる所でお目通りを致した、それでは是より一杯呑みませう……」お相撲は呆氣に取られて見て居りましが、
たが、〇「ヤイヤ、二子山道理で敵はない筈だ柔術の先生だ此方は又劍術の先生、成程先生同士のナニは別だあア……」△爾うさ己れも初めから何うも怪しいと思つた……「お相撲達も竹内先生と聞て遂ひには皆各自に謝するから、當イヤ、ヤ謝する所はない此處へ宿屋の亭主も出て参りました、亭ヤモウ按摩さんどやしては失禮……何うも此間鳥渡お呼び申した時に普通の按摩さんとは思へなかつた、殊に宮本先生のお泊り下すつたのは私の家の譽れ、何うか十日でも二十日でも一年でもお泊り下さいませ」之を聞て居た宿屋の若い者は、旦那様は飛

藏武本宮

でもさ、アンナ贅澤を言つて大きな事を言ふ按摩さんと聲劍家に泊られた日又は營業の邪魔になるだらうと心なき者は憂へて居る、明日に相撲は此處を發つて仕舞ひ武藏と竹内先生は一室を借りて五六日逗留致しまして武藏は親無二齋より傳はりました、兩刀の氣合、又竹内常陸之助は親の廣めた竹内流の極意、一手二手を宮本に話しをして互ひに交換をして夫より常陸之助はマダ東國を廻ると云つて岡崎にて武藏に別れて東海道を下り、又武藏殿は岡崎を立ちまして一度京都へ這入り堂上方の彦家來の内に若や佐々木岸柳が居りもせんかと尋ねました、何うも知れず是より丹波路へ這入ります、其昔し丹波には誠に強賊が澤山居ましたが、大江山に酒吞童子と云ふ鬼が居た杯と云ふのはアレは附會説で決して鬼が居たのではございませぬ、是より武藏は丹波丹後但馬の三ヶ州を過ぎて美作國へ這入りました、其頃作州津山の城主は浮田中納言秀家卿でございまして、之を寛永と致

したが爲に森大内記公が在城のやうにやす人もございませぬがマダ
其時分は森公は在城ではありませぬ而して此津山には劍道の達人
其外鎗術馬術弓術砲術武藝は悉く先づ其頃ひの大名では津山公が一
番と言はれる位、それを聞きましたから何卒津山城下へ参り有名る先
生と立合をして修行を致したいと云ふ積りで日に歩み夜に泊つて此
道へ這入り丁度津山から致して一里半程此方の新田村へ参るとモウ
日は暮れて仕舞ひました故に何處か宿はさからうかと思ふと向ふに
木賃宿と云ふ看板が出て居るから、武ハイ強よ………亭主がそれへ
出て、亭ハイ此方へお通んなさいませ、不潔しい宿屋でございませ
るかお泊りでございませぬか「武アイ今晚津山迄往きたいか何分津
山迄はモウ遅うあるに依つて一晩泊めては呉れまいか」亭ハ一左様で
ございませぬか、それにモウ今頃から津山へお出でなさいませぬと、本町
へ這入つて仕舞へばモウ宜しうございませぬが、城下外れの並木が物

騒で此節は天狗様が出まして夜分にあると通行人がございませぬ
宮ハ、ア左様か別に氣にも留めず笑ひながら足を洗ぎ一室へ通つて
間もなく入浴も済み湯膳を喰べて居ると隣りの室へ泊つた商人の
客人二人「〇、モシ彦兵衛さん昨夜は三人切られたさうだ」△「ハ一左
様か、エライ物騒事だ」〇「何でも人の噂では人間じやない天狗様だ
と云ふ評判でございませぬ」△「ハ、ア左様かの、マア晝間の内であけれ
ば津山街道は通らぬ事さ武藏は此話を聞いて、扱は先刻當家の主人が
異事事を言ふと思つたが其話に違ひないと思ひ態々報場へ参つて
宮ハ亭主、今隣席に泊つて居る商人達の話に昨晚二人切られたとか
投げられたとか言つて居るがアレハ何か」亭ハ左様でございませぬ、ソレ
は此節津城下外れへ每晚何でも天狗が五六羽も出ましてな、人を捉ま
へて田の中へ投つて見たり、手向ひをする者を切て見たり、何でも先月
の末から始まつて此節は夜分にあると一人として通行人はございませ

官本武藏

せん「武、ムー左様かそれは面白い何時頃に出るだらう」亭「左様、マア宵の内は餘り出ません何でも十時過から出始めらさうです、モウ知て居る者は其時分は通りませんが知らぬ者は皆捉まりますさうです」武「ハ、ア左様か面白い乃公が今晚往て見やう」亭「マア貴下飛でもおい事を仰しやいます、若やお怪我でもあつたら何うおさいます」武「ナニ怪我は少しも驚ろかない爾う云ふものは一つ退治て呉れやう」亭「貴下は全体何う云ふお方で居らつしやいます、劍術の先生ですか」武「イヤ、劍術の先生と云ふでもないが少しばかり劍術の稽古をして國々を廻る者、爾う云ふものゝ出會はんければ修行にはならんから強て往きたい」此時宮本武藏とは亭主は知りませんから、亭「それじやア、ア往て珍覽おさい、何でも危きに近寄らず人が投げられる處でも見たら歸つておいで、おさい、宜うございますか」武藏は十時少々過に唯だ一人宿屋を立出で是より一里七八町もある所を宿屋の亭主から、詳

官本武藏

く聞て急いで参りますと折しも秋の半ば殊に月夜にて心地能くブラリと参る内に少し空模様が悪くなつて月は雲間に隠れましたから却て都合好しと武藏は彼方の並木の所へ参つて松の根に腰打掛け何か出るであらうと待つて居ると向ふの方より黒頭巾を被つた者が二人來たと思ふ内に又一人松の木の下から來た様子、之は武藏が此處に居るのを知て來たのか知らずに來たのか更に様子が分りません、武藏は立上がりまして旅人の体に何氣さくツカ、とそれへ参ると左方から一人「ヤツ」と云つて切付けたを「エイ、イツ」と体を交して投げる途端に右に居つた一人が大刀スラリと引抜て「己れ手向ひするか」と切付けるを早速の早業向ふへ投げる、尙ほ一人續いて切込み遂には三人一齊く掛かりましたを箱根山にて彌太郎より學んだ天狗飛切の術にてヒラリと彼方へ飛上る、武藏は一刀を抜かずしてトウ、三人を投倒す、三人の者は驚ろいて却て武藏を天狗ではなきかど二人の者は

官本武藏

本町の方へ逃て往く續いて一人も逃出すを此時武藏は考へて扱は若
侍士が刀試し斯う云ふ輩が犬を切て足に噛付かれ或は橋の欄干や並
木の立木を切て刃を損すと云ふ馬鹿者の類取押へて意見を言ふて吳
れやうと追駈け参りますと彼の者逃道を失ひマゴトとして並木を少
し離れたる松の林の内へ逃込ひと木の枝に結び付けて一の紙帳が釣
てある是幸ひと追はれ來つた此天狗は突然紙帳の中へ逃込むを逃し
はやらじと政名先生紙帳を上げて彼を掴まんと片手を差入たる時
より武藏の手首を捉まへた者があるサシモの武藏も身体が解れ之り
や今追駈來つた天狗の輩ではさい何者が居るならんと紙帳の外より
聲を掛けました扱政名先生の手を掴んだ者は何者でございませうか
次回に演じます

第十二回

木の間に紙帳を釣て居ると云ふのは怪しいやうですが昔しは武術修

官本武藏

行人又は六十六部杯が旅へ出まする時は何れも油紙の紙帳を用意し
峯に上り麓に下り又は原野に宿る所がさい時は雨露を凌ぐ爲に紙帳
を釣て寝る事は間々ございます今宮本に追駈けられた一人が其中へ
逃込みましたから彼を取押へやうと差入れた手首を捉へられた内に逃
込だ者は紙帳の後ろを明けて逃げて仕舞ひました餘りの事に武藏は
驚いて、武何人であるか姓名をど云ふ時に、○ア、能う寐て居る
處を無法に一人飛込み來り又一人が手を差伸べて私が頭を撫でた
故押へたのだと紙帳を上げる途端に月は雲間を離れて盡の如く、○
オ、お若い方は何人だと言はれて武藏は「恐れ入た、身は河鹿の湯
仁にて在すか拙者は此節當城下に夜を怪しの者が出て試切りを爲す
とか云ふ之を取押へんが爲に酔狂のやうではござれ宿屋を立出で
之へ來り三人の怪しの者を見受けたに依て之を取押へんとしたるに
二人は早くも逃去り今一人が此中へ逃込みたるが爲に取押へやうと

藏武本宮

致したをば身の爲に手首を取られ恐れ入た、手前事は宮本武蔵政名でござる。○「オ、扱は無二齋殿の御子息あるか、斯は恐れ入た」武、シラ「親の無二齋を修存じの修許は……後へ下つて、○我等は吉岡憲法……」武、ナニ吉岡憲法氏……武蔵も驚きました、此吉岡憲法に就て鳥渡お話しがございます、此憲法を兼房と書てあるものもございます、が全くは憲法と云ふのが本名でございます、元此人は京八流の達人でございます、之を後に鞍馬八流杯と人が言ひます、之は鞍馬に八人の僧があつて何れも武術を盛に致した、が爲に鞍馬八流杯と言ふがソツな流儀はございませぬ、京八流が本統でございます、此憲法の伴を又三郎と申します、然るに度々トイ事を申し上げてお目障りにありませう、が宮本の傳記を皆寛永時代に作つた、が爲に前の竹内常陸之助を其子の加賀之助にした如く、憲法をも伴の又三郎にしてございませぬ、が全くは憲法が其時分の人でございます、此人京八流から致して一度武

藏武本宮

藏の實父無二齋先生に就て武術を學びました、が若い折酒を好み、まして無二齋先生に小言を食ひ、遂には自分から退身致しました、が仕録には吉岡流と一派を廣めました、元此人は京都の或る雜屋の形付の職人で、形を付けながら籠を持つて、鯛を打つ事に妙を得て、それから劍術を學んだ、杯も申しませぬ、が夫は全然空談で決してソツな人ではございませぬ、都に居つて室町家に仕へて居つた立派な人でございませぬ、此人の流名は吉岡流と云ひ、或は憲法流と申したのが實際で然るべき、書物にも皆斯の如く出て居ります、ソコで武蔵は「それでは其以前、父上から聞た憲法氏はお手前であつたか、始めては面會を致した、其時は手前幼少にしてツイ、尊顔を忘れて仕舞ふた、何故憲法先生が之へ……」憲と申すは矢張り、お手前と同様、當津山街道の並木に天狗が出て人を害すとか、或は刀試しをする者があるとか云ふ事を聞て、爾う云ふ心得違ひの者は取押へて意見でも言はうと、酔狂のやうではあるが

藏 武 本 宮

態々都を去て此處へ來り餘り眠さに用意の紙帳を釣り其中で今トロ
と目睡んだ處へ何かは知らず驅來つて紙帳の中へ這入る奴があ
る目を覺す途端に身が差伸た手が手前の頭まへ當つたのだ「武、ヤ
之は恐れ入た併し吉岡先生に之にてお目に懸らうとは思はあかつた、
それでは兎も角も憲法氏此紙帳の中で夜明しをなさるは却てお身の
毒今晚は手前宿へお泊り下さるやうに言はれて憲法も盛て紙帳を取
外し大きな麻の袋に這入つて居る食物を提げて殊に憲法先生は頭
毛は剃つて坊主でございませぬ異な妻をして宮本と共に夜の二時々分戻
つて來て宮本は「宿屋表を明けて呉れい」亭へ「何でございませぬ」
武「先刻天狗を退治に往た侍士だ」亭「ソリヤ喚アどんモウ化けて來た、
馬鹿なお侍士が天狗退治に往く杯と出掛けなすつたが定めし殺され
て仕舞つて化けて來たのだらう……私の方へ化けて來るのは少し見當が
違ひませう」武「早う明けて呉んか」亭「いゝ」明けませぬ」武「乃公

藏 武 本 宮

は化物でも幽霊でもない早う明て呉れると笑ふて居る戸細に明けて
覗いて見て「亭、喚アどん幽霊が連を連れて來たせ、シラ見ろお前坊さ
んが居るじやアいか彼是れ言ふて居るから武藏はモドカしく思ひ
戸を押明けてツカ」と這入れれば後に續いて吉岡憲法も這入つて來
るを宿屋の夫婦は驚ろいて居る、武「コリヤ」何も心配は要らない、
モウ寝る間もあるまいに依て酒を一抔燗けて呉れる是から亭主が其
處へ來て親しく尋ねますから詳しく話すと「亭、それぞやア京都の
吉岡先生貴下は宮本武藏先生……」喚アどん剛いお方が宅へ泊つて
下すつたろ、之が已れの宅の看板になる譽れにあると亭主は大に喜び
亭「サア」おあがり下さいませ酒は幾らでもございませぬ、
致しませぬ故に之を斷つて居る内にモウ夜も明けました處へ浮田公
の御蔭中よて大瀧要人と云ふ人が出張を致しまして、要「コリヤ」
亭主、當家に都からお入來にあつた吉岡憲法先生、宮本武藏先生、伊在宿

宮本武藏

に於る様子……亭へ……左様でございます」大瀧要人が出張
致した、御面會を願いたい宿屋の亭主はキヨロくして何事が出来た
らう、お小言ではあいかど心配をしながら取次をする。大瀧要人は兩
先生に面會をして、要實は昨晚、身等の爲に取押へられやうとした
は當家の足輕組の者に致して、鶴殿、清平、竹村、喜左衛門、伴野兵衛、此三人
の者は、劍道を能く仕ひ、侍士の中にてもナカく及ばぬ位、赤腕、此三
人が申し合せて、城下は出て人の命を取るのではないが、唯だ腕を堅め
んが爲に人を取って投げ、或は眞と切らずして切ると見せて腕を固め、
して居つた、然るに昨夜、お手前達の爲に三人に取押へられやうとした
と今朝目附達へ彼等自訴致したに依り、法通り三人は半へ入置た、其内
の一人曰く、紙帳を釣て居た一人の老人と尙ほ若き侍士との話を、木陰
にて承り、兩先生と云ふ事を知り、後を尾け、悉れば當家へ参つたとの訴
へに依り、推參致した、彼の三人の者は、何れ重き刑にも行ふべく、それは

宮本武藏

後しての事、然るに早くも家中の若侍士達が宮本先生、吉岡憲法先生の
お名前を聞いて、太守へ申し上げし處、主人秀家、公殊の外、御満足に思召し
兩人が當城下に来たる事、幸ひなり、早う呼べどのお言葉に依り、我等お
迎ひに参つた、コリヤ、宿屋の亭主、能くも其方は斯う云ふ先生を宿
へ泊めた、孰れ上から、御褒美が出る、宿屋の主人は、大きに喜び、褒
褒美は、幾ら出ませう、要、ソノ事、分らんは……是より宿屋の亭主
も、供を致して、憲法宮本の兩人は、津山の城内へ這入りますると、暫時
控へ、さして、充分のお手當、爾、斯うする内にお、查少く過る、刻限にお、查
食を頂戴致し、案内に連れて、お馬場へ参りますると、お馬見所の正面に
はお毛氈を敷き、浮田秀家公は、若坐遊ばされ、御重役が三十八名、お目見
以上の人が二百名、お目見以下の者が三百人、何れもお馬場の左右に、并
び、今や、遅しと待つ處へ、大瀧要人の案内にて、外見にも、構はぬ、吉岡憲法
宮本武藏の兩人は、お馬場へ出ますると、一枚の薄縁が敷てある、それへ

藏武本宮

兩人坐を占めると秀家公は傍前へ出でられ侍殿爽かに、秀憲法武藏
兩人侍身等は今戦國に其名も高き武術の達人此度當城下へ來り候段
予も過分此に於て願くは名人同士の立合を一見致したしどのお言葉
でございますお受けに及んで宮本武藏直ぐ又憲法氏と立合はんと此
處はマダ年若故に血氣に逸るを憲法は老体故言葉靜かに、感有難き
太守のお言葉に候得共武藏政名は吉岡無二齋の伴にして若年とは言
へど劍道は名人此憲法は最早老体にしてナカク、政名には及びずま
すど云ふの味亦言葉が尙更む意に適つて、秀勝敗の論には及ばず唯
だ侍身等兩人の立合を見たしど二度のお言葉に己を得ず、然らば
武藏殿一本立合ませうか、武心得ました茲に於て憲法と武藏は互に
木劍を執て其場へ立上がりました此時大流要人は股立を取上げて素
足にありお馬場の砂を踏で、別に行司役と云ふ迄の腕ではありません
が双方無禮のさきやう又大切な立合ですから所謂検査役でございま

藏武本宮

す此時秀家公は馬見所の一段低い所迄お降り遊ばして傍殿遊ばすは
家來一同はシンとして居る、悠々と致しまして互に合釋此時吉岡憲法
は名人武藏は達人ナカク、立上る迄は容易ではない双方腕み合せて居
る内に、ヤ、エー、イツ、掛聲と共に立上がり憲法は木劍を右の手に持
左の手を帯の所へ當がひまして浮懸に構へ、浮懸とは眞直き構へで
さいます、武藏は例の通り左の手に持た木刀を頭上へ上げて所謂上段、
右の手に持た木刀は正眼之を天地陰陽の構へと云ふ又或時は向ふの
相手に依ては木刀二本をブツリと下げる構へ方もありますさうで
すが兎に角憲法を相手ですから斯く構へものでございませう、武藏が
突然打込で來たのを憲法ヒラリと後へ体を交しました而無三仕舞つ
たど武藏は左劍を持つて拂ひますると憲法は又此方へ飛びボッキリ
受止める折しも又武藏が右の手に持た木劍にて拂はんとするをボキ
リと受ける、此時は驚ろきました、武藏は二本此方は一本其一本の木刀

藏武本宮

百五十八
が二本よりも働きが激しくエイヤ〜と打込まれて政名先生は少しく後へ下つて之では往かんと又取直して稍暫くの間双方共天で三合地で二合沈んで受ける虚々實々千變萬化を盡して立合つて居る内武藏の方よりも段々疲れが出まして身体はビツッヨリ油汗をかき憲法も若き折と違つて眞青にあつて油汗を出し双方睨み合つて居る内に宮本武藏の目よりダラ〜と血が流れ憲法の鼻よりもダラ〜と血が流れ出る木刀と雖も互ひに眞剣を持って立合ふ如く武藏の鬚の毛は逆立ち憲法の頭りは血の汗が滴れるかと思ふばかり双方所謂固くなりました此時大瀧要人が「アイヤは両士勝負は是迄……秀家公も「要人早う止めい」ナカ〜容易に止まらせんから大瀧要人が鐵扇を執て真中へ出で双方を押分け 雲モウ是にて充分は立合は相分つた言はれてハツと氣が付く宮本後へ下つて木刀をそれへ置て、武吉岡憲法先生若年の武藏甚だ恐れ入た逆も傍身には及ばん」憲イヤ〜政名

藏武本宮

殿感心した吾も若き折より夥多の人と立合をしたが傍身の腕には恐れ入た憲法遠く及ばん」武イヤ〜政名は遠く及ばん双方譲り合ふを見て太守は兩人の腕前と云ひ心と云ひ實に感心遊ばされ彦家來大勢は今ならばヒヤ〜と云つて所謂拍手喝采でせうが昔しの事ですからワ〜ワツと聲を揚げました茲にて兩人も暫時休息後武藏の目から血が出た憲法の鼻から血が出たと云ふのは之りやア實地に至つて見ると能く言ふ言葉ですが藝人が咽喉から血が出る迄饒舌り血の汗を揮ると云ふが双方眞剣になると斯の如き事も幾らもある事です、ソコで今日の勝負は何れが勝何れが負と云はずして勝負あし然れば武藏流祖録にも吉岡憲法は宮本と立合をして其勝負分らずと出てありませす大層太守は感心遊ばし充十分のお手當を賜はり「願くは何うぞ當城内に足を留めて居て呉れと云ふお頼み其晩は親しくお側へ召されて兩人も傍酒を賜はりました武藏先生は有難き太守のお言

兼だが自分親の敵討を致たし又一度は熊本へも往きたいと云ふ處から強ての傍上意を以辭退し上げ僅か一箇月程足を留り伊家來の人々に二刀の氣合杯を致へて此處を立去り憲法は津山に居り事遂に三年たさうでございます此老人は後に都へ立歸り仔細あつて和果てました之は憲法のお話し、武藏は作州津山を立て一度肥後國熊本へ参らうと云ふ途中播州姫路の尾引城其お天守に此程夜々怪物が岨で姫路の藩中驚るいて誰一人も其妖怪を見露はす者がございません故遂に宮本は太守の許しを受け姫路のお天守へ上り其妖怪の身体を見露はすと云ふ世に名高きお天守改めの講談

第十三回

宮本武藏が播州姫路のお天守改めを致したと云ふ事は只今の世迄も諸人言傳へて居る名高きお話しでございますから茲に一回演じます併し世の中に化物の論を立てますと先づ幽霊と云ふものは無いと

云ふ之は幽かの靈にして神經でございます例へば人を殺せば其殺した時の向ふの悔しがる顔つき或は息を引取る様子杯が己れの目に影つて居りまする故に自然と其事を思ひ出し何を見ても先方の姿に見へると云ふ所謂之は神經の作用であります之に反して化物は全くありませぬ何となれば世界の物に化かいた物は早い早く言へば世の中が段々開けて参れば開化の世の中だと云ふ即ち開けて化けて世の中が變つて来る又清水を器に汲で長く置けば遂に其水腐り中に蛆杯が生く是れ水の變化又桶が年を経れば石と化す即ち化けるのです斯う云ふ類は擧て算へ難い位人間は化けぬ代りに遷けて仕舞ひます餘事は拙きまして播州姫路のお天守に守護神と致して小刑部明神と云ふがございます其由来を尋ぬるに元來姫路は別所小三郎長治の持城でございしましたのが豊臣秀吉公の御手に入り夫より要害を堅固にせんとして竹中半兵衛重治小寺官兵衛孝高の兩人に命と賜ひ繩張を改め其序を

藏 武 本 官

以てお天守を築きました其築くべき地所に五輪の古墳がございまして之があつては障礙にありませ故夫人に命じて取毀たんと致しましたる時不思議にも俄かに暴風吹起り樹木枝を鳴し且つ大雨が降來りましたから其日は中止致しました然るに其夜秀吉公夢所にあると美しき官女桃花の如き唇を動かして君願くは妾が言ふ事を聴賜へと呼起しますからお眺め遊ばすと此官女が

現なら跡の印を誰にかは問れしものゝありてしもがな

と之を三度唱へましたから斯は不思議なる事と秀吉公俄然お床の中よりお立上り遊ばさうとするをお側に居りました者が「此前々々を云ふ聲にお目をお覺し遊ばした之を全く夢でございまして茲に於て秀吉公は不審に思召し小寺官兵衛竹中半兵衛の兩人を呼出して昨夜の奇夢をお話しになり何か此邊りに靈場でもある事ならんどのお尋ねに半兵衛の申し上げるには、此は足利將軍信氏公の執事高野武藏守

藏 武 本 官

師直の娘小刑部姫とやす者久しく禁中に仕官仕る内に伏見の中將殿息男出羽之助諸道とやす者と密かに通じ遂に其事露顯致し出羽之助は此地へ左遷ひ小刑部姫も其後を慕ひて當所へ尋ね來りし後幾程もなく出羽之助は配所の愛に堪かねてか空しく當所てに相果てました故小刑部姫の歎き壁ふるよ物なく悲嘆の涕にくれて之又問もあく世を去りしを里人等が憐れに思つて厚く之を諱り碑を立てる由申し傳へると云ふ事を明細に申し上げますと秀吉公之を聞し召され然すれば昨夜の夢は其碑を何處迄も遣さんが爲の願にてありつらんと流石は三國無比の名將故早くもお考へなされて然らば之を天守の守護神と致したが宜からうとて遂に此小刑部姫を崇つて小刑部大明神の神號を贈り天守の内之を祀る事になりましたナゼ之を尾引の城と云ふかどやしますれば之を祀りました當座は城中宿直の者共が夜分よなると長き毛を引づつた怪しの婦人の姿を折々見たと云ふので自

然と此事を言傳へて尾引の城と申します武藏が姫路お城下へ参ると
其時にお天守は怪しい物が住んで居てお天守番はすすに及ばず時に依
ては涉城下の人々も怪物の爲に橋を聞き殊には武藏先生佐々木
柳を尋ねる一の便宜とならうかと思ひました故に宮本武藏と名乗
らすして吉岡七之助と云ふて姫路城内へ足輕に住込みました其頃の
涉城主は木下勝俊殿でございますで城内の足輕連中は毎夜お天守の
下を廻りソレ昨夜は怪しい物を見た又は誰か目を廻した杯と毎日の
評判愈々武藏が廻る當番になりました時にお天守の下を廻るばかり
では面白くないから何うかして上に上つて見たいと考へ其夜の六時
々分お天守の番頭井上幸五郎諸岡金太夫の所へ参りまして、七お願
ひ申します「番頭何である手前は……」七お足輕七之助でございま
すが今晚は唯だお天守下お馬場等を廻らす致してお天守の上へ上つ
て一夜番を致したうございます「番頭ヤ、コリヤ」何を言ふ容易な

らぬ事を言ふ奴じやナカ〜以てお天守の上杯へ上れるものではな
い「七お許しになりませんか」番頭イヤ許さぬ事はないが上れば必
ず小刑部明神のお罰を蒙り両眼が潰れると云ふものか又はお天守上
り身体を大地へ投げられて一命を落とすと云ふものか必ず無事では
無い「七イヤ其處でございます爾う云ふ事を聞けば尙更上りたい凡
る世の中に不思議はない筈小刑部明神と神に崇められたるものが罪
なき人の命を取る杯とは甚だ以て奇怪千萬是非共上りたい此七之助
は一命を棄る覺悟でございます」番頭兎に角待て、維令お前が當番で
あらうとも新参の足輕如きに其様な事を直に許すと云ふ譯には往か
ん今夜は先づ當り前にお天守下お馬場等を廻るか宜からうお前が夫
だけの度胸があつて怪物を見露はし又は妖怪を退治ると云ふ志しは
最も賞めべき事であるが事重大の件であるから只今我々に於て取
らう譯には参らん依つて明日重役を以て上へ願ひ出る迄待て「七左様

でございませうか。其夜はお天守下のお馬場を廻りましたか。成程夜の二時を分になるとお天守の上にて怪しき物音がしますから大に不審を打ちました。其明る日になると諸岡井上の兩人は直ぐに重役へ申し上げ重役より太守勝俊朝臣へ七之助の願を申上げると太守は御足に思召して一期半期の奉公人身分輕き者でありながら其様な剛氣のあるのは誠に以て感心事である。之は許して遣はせどのお言葉でございませうから直ちに重役は諸岡井上を呼んで右の趣きを沙汰に及ぶ。併し其者血氣の勇に逸りて空しく一命を落すやうの事があつては宜くない。兎に角身共の屋敷へ連參れ其人物を見たいと云ふので七之助をば重役齋藤甚太夫と云ふ人の屋敷へ呼寄せ七之助の舉動を能く見ると何となく尋常人でないから重役も委細承知とあつて急々武藏の願ひが叶つて其夜にあると支度を爲しお天守の番頭諸岡井上の詰所へ參つて夜の更けるを待ち早や十二時近くにありましたから番頭

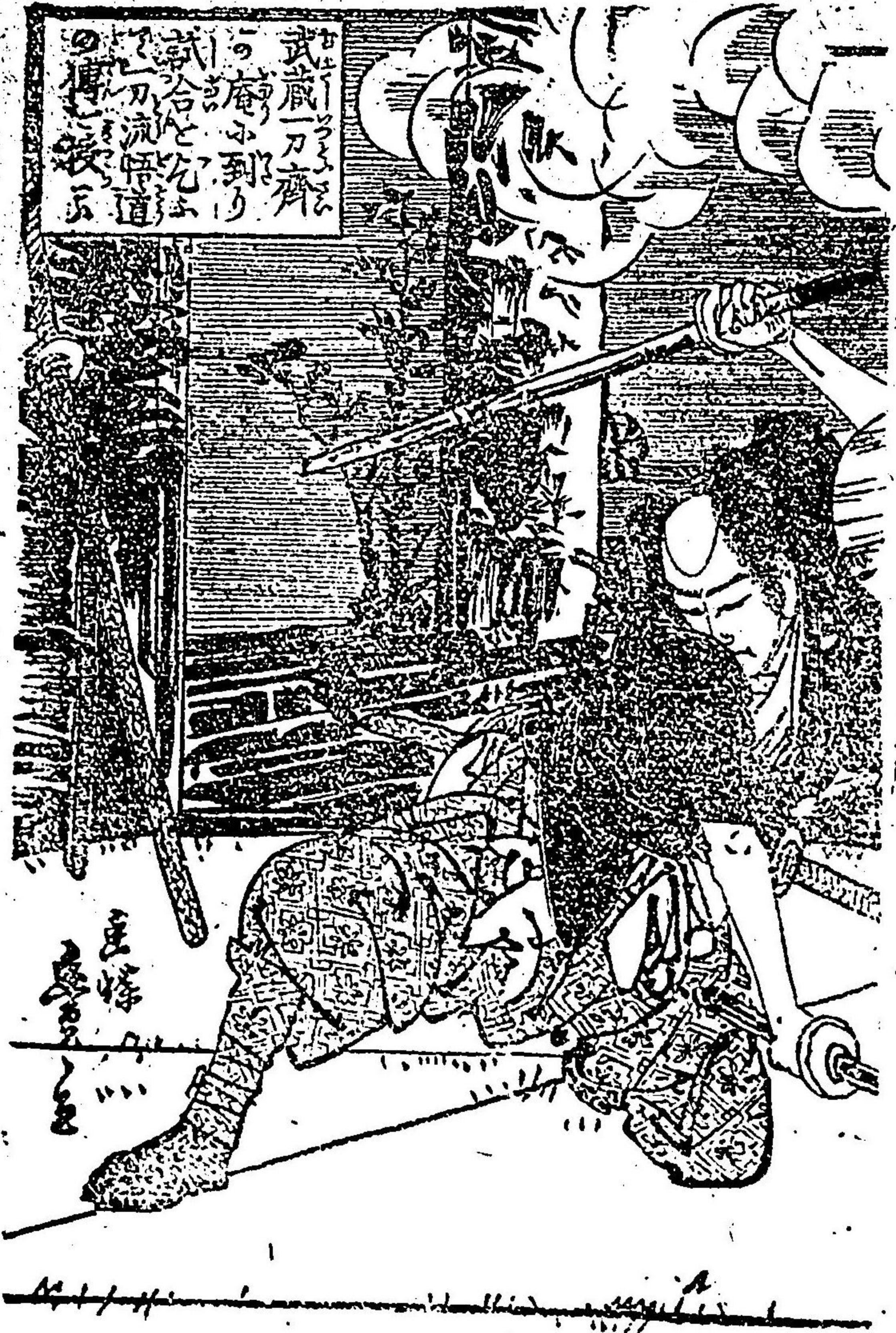
の詰所を出でますると諸岡井上の兩人もお天守の一番下の櫓子段迄送つて呉れました故。七「イヤモウ是にて宜しうござる」兩人宜う氣を付けて……手燭を差出したる時に七「アイヤ之は往けない怪物を見歸はすに燈火は却て宜しくない」と獨り唯だ一人氣強くも第一階から二階三階と遂に五重の天守の頂き迄上がりますると此所は疊が凡ら二百疊も敷けると云ふ大したものでございませう彼の尾張の名古屋城即ち名高き金の鱗の上つて居りますとお天守へは貞玉も青年受知に暫く住居致しました折に拜見を許されて屢々上りましたが一番下の所は成程三百疊も敷かるかと思ふ程でございませうが一番上は漸く三十疊位あるものと心得て居ります。然るに其時分の姫路のお天守は上が三百疊も敷かると云ふ大したものでございませう。此中に又一重を作つて之へ小羽部明神の靈を祀つてあります。武藏は悠々と進んで其神前を見るに浮籠は半ば破れて落ち何となく神威も衰へて物姿も有様

藏 武 本 宮

でございます其邊りへヒタリと座を占め何か出よかしと控へて居ると早や夜も八時と云ふ刻限に向ふの破れて居る浮籠の中に煙の見へる様子斯は不思議なりと武藏は両刀を側へ差置き腕拱いて見詰めて居ります内よ今明るくまつたかと思へば又暗くなる暗くなると思へば又明るくなる自然と武藏先生の身体は身の毛も立つばかりにありました其内に御座の蔭に現はれたものがありすから見ると長き髪を垂れ十二一重を着し立つばかりの緋の袴を穿た一人の宮女でございます茲に於て政名先生扱は狐狸の類からん引捕へて太守への手土産に爲さんと思ひ大言上げて、武藏先生の身を以て人を誑らかさんとするも人にこそ依れ我こそは宮本武藏政名ありと大手を廣げて飛掛らんとする時彼の官女は莞爾と笑ひ女勇なるか其勇必ず願く事おかれ我こそは決して狐狸變化の類にあらず小刑部明神の神靈あり我が靈は豊臣家の恵みに依て小刑部大明神と崇められ當城

藏 武 本 宮

守護のため此所に鎮座する上は何事か神慮に適はざらんや水難火難は言ふに及ばず當城内に異變ある時は神靈を現はし時を告げ知らせんとするに皆憶病未練の者共よして却て我を恐れて狐の業あり或は變化の業なると種々なる事を言觸せしを天下に無比なる豪傑が此五重に上がり今夜此處にあつて怪しの事を充分に認めやうと云ふは感心の至り我が日本國は武國なり武家たる者は武を忘れてはならぬの至り其褒美と致して之を取らするど小刑部明神と名乗られたる官女は手に携へて居りました小刀を武藏に渡しましたからアラ不思議なりと思ひ推戴く内に何となく暗くなり又パツと明るくあると斯は不思議なるかな今迄お天守の上のみ思ひしに芒尾花が風に戦ぎ見渡せば四望は十里あるか二十里あるか知れぬ程の原野、武、オ、扱は正しく狐狸の類にてありつるかど氣を取直し刀を執らんとして氣が



官本武藏

百七十
付けば又元のお天守の頂きでございました。爾う斯うする内に早や東雲を告げて東が段々ど明るくなり明り窓から四邊を見るに別に變りし事はあく向ふには小刑部明神を崇め奉りました宮がある唯だ不思議なるは昨夜小刑部明神が手に渡したと思つた小刀が一本其處よりました之を持って直ぐ天守を下り諸岡井上に對面を致して云々の由を申し上げると兩人も驚ろき早速右の趣きを重役へ申し出でました、抑も小刑部明神が武藏へ渡した刀と云ふのは郷の義弘と云ふ劍でございます世に之を松倉郷と云ふは越中國松倉の郷に於て假治を致しました故松倉郷の義弘と申したのでございます併し此義弘の刀は極く少ない品で俗に化物と義弘は見た事があいと云ふ位の貴とい品でございますそこで太守に於ても實に感心遊ばされました其明る日は一家中も皆擧つてお天守へ上がりましたが別に怪しい事もございません、此實際のお話しは前申し上げた通り秀吉公が之を神に崇め

官本武藏

て天守の守護神とする時に右の義弘の短劍を伊神体として纏めてあつたのを宮本が持つて歸つたと云ふのが天守改めの實説でございます然るに種々様々の面白味を付けて古い狐が此處に住居て怪を爲した或は宮本武藏に其狐が術を教へた杯と様々に勝手な事を言ふ又勝手な事を草紙杯にも書いてございますが決してうさでない此實は武藏が夜中お天守の上へ上がり小刑部明神の社の内を改めて具たら一本の劍があつた是れ總の義弘であつたと云ふのが實説でございませすが併し講釋も餘り實地ばかり述べますと味がなくあつて仕舞ひまする例へばお肴を召上るにしても幾ら旨い刺身でも醤油を付けなければ旨くないやうなもので其れに味を付けて婦女子の目或は耳に面白う聴かしたものです、ソコで太守も武藏の度胸を感心遊ばされて右様なる者を足輕に致し置くは惜き事であるから取立てやうと致しましたる時に始めて宮本武藏政名であると名乗りましたから重

役始め家中の面々驚ろいて直に太守に申し上げ太守よりはお目通りを許され此處に一百日程足を留めまして家中の者に二刀の術を教へ、夫より一度熊本へ立歸らうと當城下を立ち其途中に於て圖らずも一人の町人を助け之が爲に佐々木岸柳の所在が知れ數年の苦心空しからず遂に親の敵を討取ると云ふお話し

第十四回

茲に宮本武藏は姫路を立ちまして五六里参りますと最早逢過にありました故或る立場茶屋へ道入り食事を爲して居りますと向ふに深紅笠を被りし一人の侍士が酒を呑で居りました其處へ表より町人体の旅人二人連にて入來り彼方の椽臺へ腰打掛けんとしたる時に如何なる機みか彼の侍士が椽臺の上に置きました刀の鎧へ衣類でも觸りましたか其刀が椽臺より落ちまえた之を見て彼の武家は大に立腹をして三人の町人を取押へ侍士其方は不屈きな奴武家の刀を足踏に

宮本武藏

宮本武藏

致した上は勘辨ならん二人は驚ろき両手を支て謝しましたが聞入れんで無禮打にすると云ふ立場の亭主も共々に謝りましたが承知しさい、其内に表には夥多の人が集かり逃場も亦く二人は眞背にあつて謝るのを聞入れんで今や一人の首を切らうとするから先刻より眺めて居た武藏先生は彼の侍士が笠を脱がぬから分らぬが事に依たら佐々木岸柳ではないか縦し爾うでなくも二人の町人を助けんと其處へ飛込みますと要らざる事をするかと武藏へ切付ける体を交して彼を投げ、る投げられた彼の侍士は面目なげに逃げんとするを追追つて笠を取り顔を見ればマダ漸う二十八九の侍士にて岸柳ではございませんから武藏は意見を言ふて放しました町人二人は大に喜び、町貴下のお蔭で助かりましたお武藏様は命の親、伊禮の爲お酒を一献……武、イヤ、其様の心配には及ばんシテお前は何處の者か、町私に豊前の小倉の者で巴屋五郎兵衛と申しまして旅籠屋を致して居る者、播州巡

りを致して今國へ歸らうとする途中、此者は私の手代を致して居る重助と申します、イヤモウ彼のお武家様へ粗相をして既に首を切られるかと驚ろさされた貴下のお蔭で助かりました、シテ先生様は何處の修仁……武イヤ、私は名を名乗る程の者ではない、五併し旦那様何うか私は貴下にお禮を致したうございませうから、武イヤ、一禮杯は決して要らぬ時に町人相尋ねるが小倉は當節黒田公が伊城主だ……今迄小倉原公で讀で居りましたが之は實然に讀したからの事、實際其頃は黒田甲斐守殿がお預り遊ばして居たのでございませう、武後の黒田家は當節武術は盛かな、五へーモウ讀に盛でございませう、武殿が城下々々の人に武術の話しを聞くのは第一に岸柳の所在を早く知たいたからでございませう、此立場の亭主も元は武家と見へて色々武術の話しをして興に入居る内、早や夕景になりましたから、旦那様方、不潔しい所ではございませうが今晚は如何でございませうお泊

り下さいましてはと頼みますから、早いがそれでは泊らうと茲で三人が泊る事にまつて其夜武殿は巴屋に向ひ、武今小倉では誰が一番武術で名を得て居るかな、五何でも尋ねて来れば一藝ある人は皆お抱へになりませうが先づ只今伊城下にあつて劍術を大層盛にしてお居でなさる方は佐々木勘太夫様……皆で聞かず、武ナニ佐々木勘太夫、シテ其者の年齢又は人相は……問はれて一々答へる其言葉寸分違はぬ佐々木岸柳、ヤレ嬉しやと宮本が「何うか巴屋、私は熊本迄往くのだが一度小倉へも参りたい、お前の宅が宿屋とあれば尙の事一夜泊ては與まいか、五へー一夜處ではございませう、一年二年お泊り遊ばすとも決して爾う云ふ事は、修心配遊ばしますな、貴下は大恩人併し今佐々木勘太夫様のお噂をするとお顔の色が變りまして何やら物案じをさされる伊様子、それには深き仔細もございませう、私は町人ではございませう、れと巴屋五郎兵衛と申せば小倉城下では少しは顔も知られ



宮本武蔵正明



小刑部大明神

宮本武蔵

蔵 武 本 宮

て居ります者併し今日貴下に助けられて始めてお知合になつたばかりでは馬には乗て見ろ人には添て見ると申しますから私の氣性もマお分りにはなりません貴下のお名前は全体何と仰せられますか武それはマア孰れ小倉へ参つてからの事にしやうと三人共寢に就き翌朝は打揃ふて當所を立ちました途中の話は別段ございませぬ日を重ねて豊前の小倉へ乗込み巴屋五郎兵衛は宮本を自宅へ迎参り女房や若い者にも紹介して大層取持つ其夜始めて巴屋五郎兵衛に向つて武彼の佐々木勘太夫の宅へ明日案内をして貰ひたい旨は拙者は吉岡無二齋の一子前名七之助當時宮本武藏政名であるエーッと五郎兵衛は驚ろいて五マア貴下は宮本先生それでは彼の佐々木と云ふ人は……武之は今國々で誰知らぬ者もない本名佐々木岸柳に相違ないけれ共當人の顔を能く見ぬ内は世間には同姓同名の者もあるが若し岸柳あらば親の敵である眞心を表はして武藏の物語り聞くと

蔵 武 本 宮

り五郎兵衛は「宜うございます、それでは明日貴下は劍術の修行人となつてお出でさされて充分向ふをお認め遊ばせ併し向ふには弟子も大勢居りますから御油断おされませぬ」武「ナニ弟子が何百人居らうと夫等に驚く武藏ではないと勇氣を増して翌朝巴屋五郎兵衛番頭重助等の案内に依て宮本は小倉の裏町佐々木勘太夫の道場へ参りますと勘太夫も五郎兵衛は知て居るから奥へ通し、勘「何だ……」五「エー先生劍術の修行人が一人尋ね参りました」勘「何といふ名前だ」五「宮原金十郎と申す者で今迄國々を廻つたが何れの道場へ参つても不覺を取た事は一遍も無い、就ては佐々木先生に一本立合を願ひたいとマア年若き侍士で大層高言を吐て居ります、昨夜私の宅へ泊りましたがア一云ふ天狗の鼻は先生のお腕前で敲き折ておやりなされたら宜からうと心得て連れて参りましたと旨く欺けば 勘「宜しい爾う云ふ奴は門人共に……」五「エ先生ナカ」口ぶりの様子では劍術も能く住

蔵 武 本 宮

ひさうですからお弟子を出すより最初に貴下が天狗の鼻をお折ら遊ばせ然迄愚かき岸柳ではないが遂には五郎兵衛に欺かれて爾うかど云つて道場へ出て参ると雖て巴屋の手代重助は道場の脇に向ふに顔を見られぬやうにと潜んで居る宮本の側へ参つてサア此方らへどの案内に道場へ這入つて見れば擬ふ方なき岸柳の人相武藏政名は大音上げ、武如何に岸柳、汝我を存じ居るかどの一言にアツと驚く勘太夫の本名岸柳が「ナニ我を岸柳とは……」武「オ、汝の爲に討たれたる吉岡無二齋の一子七之助、當時宮本武左衛門の養子とありし宮本武藏政名なるぞ」岸「オ、扱は汝は無二齋の伴であるか如何にも、我は佐々木岸柳、汝の親の爲に一時不覺を取りし爲長年の間、剣道を以て世渡りもあらず、斯く致せしは汝の親、夫に依りて如何にも打果したを若年の其許が吾を討たんとして参りしか」武「固より君父の仇、俱に天を戴かず、卒さ之にて……」岸「待て武藏、汝の名も聞及び居る、何時か尋ね来る所

蔵 武 本 宮

らんど待つては居たが此道場にて我を討果す時は私達の仇討になる、夫よりも城主へ願ひ互に尋常の勝負を爲し、汝を討つか岸柳が討たれるか、武士道を立てる気はないか」と云ふのは岸柳も宮本の高名は今迄尋ね来ずし、修行人からも折々聞て居る故に兎に角此場を逃れて後に工風を旋らさんと一時逃れの一言、武藏は固より義者ですから、武「オ、汝の言ふ通り城主もあれば私しの仇討より立派に届けて後にせん」と云ふ内に表に居つた巴屋の手代重助が早くも浮城内へ馳付けお目付へ此由を申し立てましたからお目付の高岡慶藏と云ふ方が足輕二十五人を召連れて早々出張に相成り段々お調へになると如何にも吉岡無二齋の伴、武藏又岸柳は舊年無二齋を聞討にしたに相違ない事、が分りまして茲でお目付は岸柳が逃げまいよう、一時宅番を爲て其翌日に相なつて役人から城主へ申し立て急々第三日目に敵を討つ事になりましたが若し見物の内に岸柳の門人又は岸柳に恩を受た者で

藏 武 本 宮

も居て折角の敵討に岸柳へ助太刀を爲し縦令名人と雖も万一宮本の
 身體に害があつては往かんから之を避ける爲に矢來を組まうかと翻
 々様々に重役達も心を碎いた未夫よりか一層彼の中島一名小島とも
 申しますへ上陸さして船にて周圍を取巻き他人を上げずして立合は
 せるが宜からうと極りましたから此由申入れると岸柳も武藏も承知
 致し其當日は船にて漕出しまゑた尤も大昔は敵討に矢來はございま
 せんでしたか或時女と子供が敵を討つ時愈々立合の場にあつて敵が
 其場を逃去て行方知すになつた事が寛永時代にあつて夫から後は矢
 來を推らへて敵の逃ないやうにしたと云ふ事がございませぬ扱此日に
 なるも傍城下の人を知て皆一同に岸邊に駆付けて見て居ります爾う
 斯うする内に宮本武藏は巴屋五郎兵衛にお目附二人足輕六人と共に
 船に乗て向ふへ漕付け此方も同くお目附二人足輕十六人岸柳と共に
 小船にて着く此方らの岸は全然立錐の地もなき數万の見物でござい

藏 武 本 宮

ます此方は双方上陸致しますとお目附は左右を警固致して居る内に
 武藏は眞綿を刺子に致したる稽古着を着し其上に段小倉の袴を穿き
 革の遣入つて居る鉢巻を後ろにて結び尤も繪には鍵輪子を着て居る
 處が書てあります實際は爾うでない岸柳は又白輪子の衣類を一枚
 着し其上に紺緞子の踏籠を穿き総髪に鉢巻を爲して支度は充分出来
 ましたソコで繪には岸柳を討つ時に宮本は襦を執て向つたやうに書
 てあり又講談にも爾う讀む人があります岸柳程の腕前のある者
 に對して船の櫂を持つて向つた杯とソソ馬鹿な事はありません全
 くは矢張り兩刀を携へたのでございませぬ愈々支度も出来てお目附の
 一言に依て双方其處へ立出で岸柳は大刀を引抜き武藏は例の通り兩
 刀を持つて構へエー、ヤッ、と互に聲を掛け暫くの間戦ひましたナカ
 〳〵以て岸柳の鬪きは大了たもので先づ腕前を較べると岸柳の方が
 武藏より一枚方上手なのであります併し此方らは孝子の一心天に

藏 武 本 宮

通じたのでありませうか岸柳も一生懸命大刀を振つて突然宮本の腰の邊りへ切付けけるを武藏はヒラリと此方へ飛び左劔を以て切付けたのが岸柳の眉間、忽ち岸柳は仰けに其處へ倒れましたから岸邊に見て居る數万の見物はソレ切られたと聲を上げる、宮本はヤレ嬉しやと思ひけん乗し掛つて右劔にて切付けましたる時に、エーッと岸柳が起上りながら拂つたのが岸柳の妙術、岩石碎き燕返し、卑劣にも死だと思せ敵を欺きエーッと拂つた大刀の爲にアワヤ武藏は兩股の下から切取られたかと思ふばかり、此折劔道ばかりならば岸柳の燕返し、爲に足を切られるのであります、箱根山にて關口彌太郎より天狗飛切竹内常陸之助よりは柔術の極意等を學んで居りました爲にエーッと飛上りましたから岸柳の刀が武藏の草鞋の砂を拂つたと云ふ、若し武藏が二寸飛上りやうが低ければ足首を切られて歸討にあらずとする實に間一髪い處、武卑劣者だ、と大音上げて飛上がりさま左劔を以

藏 武 本 宮

てエーと拂ふ、何かは堪らん岸柳は右の手首を切られまして、岸殘念ッ……と後へ下がる處を飛下りる途端に右劔を以てエーと突く、其切先に岸柳は額を突かれてトウッ倒れました、此早業にお目附始め見て居りました人々は思はずツツと聲を上げる、武藏は隙さず止めを差し恨みの一言はやすに及ばず首尾能く此處で親の敵を討取りました、時に慶長の五年八月十五日でございまして、岸柳の死骸は別に引取人がございせんから城主に於て其邊りへ之を埋めました、然れば此小島にて岸柳が討たれたから只今では之を岸柳島と申します、武藏は黒田公の重役等に厚く禮を述べ此處に留まる事八日間にして此地を立去り、越州廣島へ参り、兄清三郎に面會致しました、之は多病にして今は殆ど隠居同様ではございませうが先づ岸柳を討たる事を兄にも詳しく話し續いて親無二齋の追善等も立派に致し一度肥後の熊本へ歸りました處、加藤肥後守清正公はお果てさされゆ子息肥後守忠廣殿

美英雄 宮本武藏終

事もあるものでございます。成程岸柳が無二齋を討たのは悪いには相違ございませぬが腕はナカ／＼達者であつたと云ふ事は確かか説でございます。幸ひに宮本武藏が仇討を致した實説が手に這入りましたから茲に更めて宮本武藏の實傳を口演爲し一冊の講談速記本と致しました。先づ宮本武藏先生のお話しは是にて大尾でございます。

伊代でございました。後に之は徳川へ敵たふ事がありました。忠廣公の代にてお家は潰れました。ソコで養父の武左衛門も年長けて相果てました。だから武藏殿は何藝にても人間は死ぬ迄は修行である。と夫より又諸國修行に出で國々を廻り末に至りて熊本に立歸り正保二年五月九日を以て病死致しまして。法名を玄信二天居士と申しました。此武藏の術を承繼で能く極めました者は門人の青木城右衛門金家と云ふ人でございます。此人後に二刀鍛人流と一派を廣めました。茲に鳥渡やし上げて置きますのは宮本の修行中には塚原卜傳其他日本國內の有名劍客者と立合の事もあります。が是等は附加へたものでございます。から略しまして以上は宮本の正味を演じたのでございます。又今迄の草双紙や何かに岸柳の事を賞めてあるのはございませぬ。之は人の敵とあつたからでございませう。が併し人は一つ悪事があつたからとて必ずしも悉く其人を悪いとは言へませぬ。人一代には善い事もあり又悪い